ふりかえって告白

巻機　鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ふりかえって告白

【Ｎコード】
Ｎ９３８９Ｗ

【作者名】
巻機　鶴

【あらすじ】
高校卒業を半年後に控え、三組のカップルが織り成す青春ラブストーリー。　光之に「亮太と付き合って欲しい」と、言われた慶子。秘かに想いを寄せていた光之からの残酷な言葉に、慶子はショックを受ける。そして、後悔の日々が始まる。　千尋は、卒業と共に北朝鮮に帰る東一に、残りの半年を捧げる。頑なに朝鮮人であることを押し通す東一。その心を、どう溶かすのか。　音楽教師の音美は、光之と東一の仲間の陽光を知り、過去を思いだし苦悩する。
彼らは卒業という節目をどう迎えるのか。　笑いあり。涙あり。

悪い子あり。そして、ちょっとエロもあり。なのかな？
恋愛小説として楽しんで頂ければ、幸いです。
よろしくお願いします。
（ｍｉｘｉ日記より転載）

慶子の都合　その1

人は生きる年の数だけ四季を味わう。
そんな中の、ある一つの秋から冬に間におきた出来事。

青春という儚くも、短く脆い時。

光之と亮太の関係は、慶子をめぐりねじれていく。仲良かった四人組から弾き出される光之。

光之の友である陽光は冗談から始まった、女教師との禁断の恋に堕ちる。
高校三年、卒業を半年後に控えた男女が繰り広げる憎愛図。
幼さと大人びた感情のはざまに揺れ動く若き男と女の青春の一ページ。

第1章　慶子の都合

1

優しい秋の日射しにつつまれた午後の教室。
窓から見える校庭で、野球をして遊んでいる奴らがいる。
昼休みだから好きにすればいい。
のんびりと流れる時間。
蝉の鳴き声はとうに消えた今。
校庭の向こうに広がる水田に、黄金色の稲が穂をつけてさらさらと風に揺れている。時折吹く強い風が、連なる水田の稲に一筋の足跡を残していく。まるで猫バスが通ったあとの様で、その先を見つめてしまう自分を笑う。

教室に背を向けて、窓際で涼風に髪をなびかせながら妄想と戯れている光之。
弁当は食ったし猫バスも見れたし、今日もそろそろフケるか。と思った時に、誰かの柔らかい手がそっと肩に触れた。
この穏かなひと時を邪魔するのは誰だ？
顔だけで振り向くと、小首をかしげて覗きこんでいる千尋と目が合う。
千尋のさらさらとした黒髪が光之の肩に触れ、間近に迫る紅く小さな唇に萌える。
少し離れた所から見れば、キスしているようだ。それくらい近い。
光之が顔を近づけると、千尋はすっと身体を引く。
「なんだよ千尋」
突き出した顔を虚しく引っ込める光之。
「うふっ、私とキスするなんて百年早いぞ」
作戦成功とばかりに嬉しそうだ。憎たらしいけれど、黒く澄んだ瞳がとても可愛い。
「まったく。猫耳付けた小悪魔だ、お前は」
わざと怒ったふうに言ってみる。すると、
「ああ～っ、お子ちゃまだぁ。光之お子ちゃま。千尋がっかり」
まったく敵わない。この話題はパスしよう。
「で、なんか用か？」
机の横に引っ掛けてある薄っぺらな鞄を手に、立ち上がりながら聞く。
千尋は右手でちょっと待てのポーズをとり、うんうんと頷いたあと、姿勢を正して光之を見る。「あのさ、実はね……」　気のせいか、千尋の声がトーンダウンして聞こえる。
「あのね、光之。慶子が……。慶子が大事な話があるから、放課後付き合って欲しいって。私も一緒に行くからさ」
だめとは言わないでと、真っ直ぐな視線で問いかけてきた。
その後は何も言わない。

『お願いだから』とか
『ねっ、いいでしょ』などの念押しの言葉はない。だだ、黙って光之の目を見ている。
その沈黙が切実さを伝える。
さっきまでの、おちゃらけた雰囲気は無い。
千尋の変わり様に戸惑うが、光之には思い当たるふしがある。
「わかった」
そう言って、教室の中を見回す光之。
黒板から近い窓際に立って、光之をじっと見つめている慶子。
まっ白い肌。左目の下にちょこんとあるほくろ。緑がかった瞳と栗色の軽くウェーブのかかった長い髪。目はぱっちりと開かれているが、明らかに不安が見てとれる。それでもその目は、光之を捕らえて離さない。
豊かに張った胸の前で、ハンカチを握りしめている。
ドキドキとしているだろう鼓動まで聞こえてきそうだ。
痛々しいほどの愛しさを感じて胸が締めつけられる。
光之は慶子の目を見つめて、ほんの少し頭を下げた。
慶子は軽く顎を引いて見せ、さっと窓の外に視線を投げた。
光之はゆっくりと千尋に視線を戻した。
ほのぼのとしていた午後が消えていく。
「まずいことになったみたいだな」
光之の視線を受けきれないで俯く千尋に語りかける。
「ところで、千尋。あのおちゃらけた前振りは何だったんだよ！
私とキスするなんて百年早い？　慶子の顔見たろ。ギャップありすぎなんだよ」　急に神妙になった千尋。
「ごめん。光之見てたら、つい……」
「空気読めよな」
「うっさいなぁ。だからゴメンて言ってるでしょ」
膨れっ面をして挑発的に睨み返す千尋。
「うん！　それでいい。お前まで深刻になるな。俺はこれからフケ

る。
後でメールでも電話でもいいからしてくれ」
「わかった。ありがとう」
光之は教室を後にした。
慶子の元に帰ってきた千尋。　窓際に二人並んで外を眺める。
「ごめんね。私があの日誘わなかったら、こんなことにならなかったのに」
ここ数日、同じセリフで慶子に謝る千尋。
「違うよ、千尋。私が行きたいって無理矢理頼んだんだから」
これも同じく繰り返される慶子のセリフ。
事の始まりは半月前の光之と東一の会話からだった。
「秋だなぁ、光之。食欲も性欲もアクセルも全開の秋だな」
峠のてっぺんに2台の単車を止めて、山あいに細長く延びる市内を眺めながら一服していた時、突然訳のわからないことを喋りだした東一。
「なに言ってんだか。年がら年中、発情してるくせに。秋も何も関係ないだろ。それにお前は胃潰瘍だ、酒の飲み過ぎで。食欲なんか無いだろ」
呆れ返った光之が、煙草を踏み潰しながらが吐き捨てる様に言う。
そんなことはお構いなしに東一は続ける。
「昨日なぁ、千尋が別れたらしいぜ」
「だから何だ？　なんか関係あるのか？」
ここで、東一と光之の見かけと、知り合ったきっかけを少し差し挟んでおきたい。

光之と東一の二人は、高校入学当初からその甘いマスクで、女子の間では密かに話題になっていた。
スラッとした二人の体型はそっくりで、おまけに顔も良く似ていた。
間違って話かけられたこと数回。その度に『俺は東一じゃない』『俺は光之じゃない』と説明して、おもいっきり赤面する女の子のダッシュする後ろ姿を見送ることになる。そして、その日、お前に間違えられたと言って笑う二人。
東一は中学の時にバスケット、光之はサッカー、それなりに打ち込んだ。
痩せ型の二人だが、もやし君ではない。
中学三年の時に、８歳年上の遊び人山口の家で二人は知り合った。『山麓の不夜城』と言われた山口の家は、深夜の2時3時といえどステレオからボリューム全開のヒップホップをまき散らかす。
親も居れば、爺さん婆さんも居る。何故か２２歳年の離れた乳飲み子の弟も居る。
初対面の人には必ず
『これ俺の息子』
と言って弟を抱いて紹介する。
山口は歳より物凄く老けて見える。だから、みんな信用する。後から真実を知って驚く。
当然、ご近所さんもある。
この騒音が聞こえない訳がない。
でも誰も何も言わない。
３０畳を越える山口の部屋には薄暗いスタンドライト一つだけ。
そこに市内外の悪ぶった男と女共が集まる。
仲良くなって外や隣の部屋に消える奴等。
仲悪くなって『この野郎、表に出ろ』と言って、表に出ていく奴等。
行く度に楽しい。

そんな山口さん家で東一と光之は知り合った。　二人が何故そんな部屋にたどり着いたのかは、後日機会があれば語ることにしよう。
淡く切ない恋など無縁。理性を捨てた肉欲のみが支配する部屋。
欲しいものがあれば、力ずくで取れ！
お互いの名前も知らずに交じり合い、次に会っても記憶すら無い不毛と暴力と自己満足の部屋。そこから付き合いたい奴だけが、お互いを知ろうとする。
そんな馬鹿げた部屋の世界で、東一と光之は着実に名を上げていった。
性欲に不満の無い二人は、同じ高校の女子には全く興味を示さない。

そんな二人。

光之の、関係あるのか？の一言に反応した東一。
「ある！」
妙に力が入っていた。
「惚れたか？」
「違う。彼女が欲しくなった」
「アホ。節操の欠片もないお前に、彼女ができるわけがない」

「千尋を慰めたい」
「慰め方を知っているのか？」
「千尋を慰めたい」
「ヤるだけが慰めじゃないんだぞ」
「千尋を慰めたい」
「死ね！　バイクと共に谷底に去れ！」
「千尋を慰めたい」
馬鹿の一つ覚えだ。

東一なりに甘酸っぱい恋愛をしてみたかったのかも知れない。
「今度の日曜日に、千尋誘って飲むか。お前の部屋で」
「秋だなぁ～」
つくづく馬鹿だ。

光之は少し不思議に思う。
東一が考えていることは一つ。
口では慰めたいと言っているが、自分の欲求を満たしたいだけ。
確かに千尋は可愛いし、そそる女だ。
山口さん家で見知らぬ女と戯れるのはいい。　だが同じ学校の、しかも同じクラスの女に手を出そうとしているのが分からない。
お前にとっちゃ、煩わしいだけだろう。女に不自由してる訳でもなし。　まさか本気で彼女にしたいと思っているのか？　お前が言う、見せかけの幸せとやらが欲しくなったのか？
来春には、海の向こうの祖国に帰るお前。何を考えている。
まぁいい、どうせ気まぐれだろう。
光之は考えるのを止めて、単車にまたがりエンジンをかけた。
「俺が千尋誘っておくわ。じゃぁな」
そう言って東一に軽く手を挙げ、アクセル全開で峠道をかけ降りた。
「おい、ちょっと待てよ」
単車に飛び乗り、後を追う東一。
夕闇が迫る峠に、二台の単車が奏でる甲高い排気音が響く。
麓の交差点で左右に別れ、それぞれの帰路についた。

家に着くと、光之はさっそく千尋に電話をかけた。
なかなか出ない、切ろうとしたところで。
「ハロー、光之。珍しいじゃん、電話くれるなんて」
「愛しの千尋の声が聞きたくなってね」

「そうなの。嬉しいけど、残念でした。愛の告白なら光之以外で受付中なんだけど」
「じゃぁ、東一なら？」「う～ん、ちょっとは考えてあげる。ちょっとだけね」
「なんか傷つくんだけど、俺。まぁいい。ところで、別れたんだって？」「ええっ！　なんで知ってんの？　昨日の話だよ」
「光之情報網を舐めてもらっちゃ困るな。そこで、傷心の千尋をつまみに、今度の日曜日に酒でも飲みたいと思ってさ。どうよ、東一のアパートで」
「あんたら二人のつまみにされたら身が持たない。いやだよ」
「心配すんな。千尋は可愛くて　綺麗で　素敵な女の子だ。俺も東一も認る『神聖にして犯すべからずの天使』だから心配ないって。憧れの千尋と一緒に飲みたいな。だから、お願い」
「感情こもってないし、説得力ゼロだよ。で、東一と光之と私だけなの？」
「来てくれるってことで、オッケイだよな」
「誉め方が足りないよ。もうちょっと、ロマンチックな台詞言えないの？」
「愛してる、千尋」
「くさい！」
「城高（城山高校）で一番綺麗な千尋。そんな素敵なお前と、僅な時間でも一緒に過ごすことが出来たなら、俺は死んでもいい　」
「合格！」
「本気だぜ」
「……嘘つくな……ばか」
「これから、行っていいか？」
「ええっ。そんな、急に……困るよ。お風呂もまだだし、心の準備も……って、光之の言うこと真に受けるわけないでしょ。言われてみたかったフレーズが入ってたから、合格。付き合ってあげる。ただ、日曜日はだめ。土曜日にしてくれない？」

「大歓迎。さすが、いい女は話がわかる。そこでお願い。誰かひとり連れてきてくれよ、可愛い子」
「いいよ、わかった。土曜日の2時頃行くね」
次の日、授業が始まる前。東一に、千尋との約束が土曜日の2時に決まったことを告げた。
「わかった」
昨日の『千尋を慰めたい』を連呼した情熱からは想像出来ないほど、素っ気ない返事が返ってきた。
拍子抜けしたが、気にする事でもない。普段の東一に戻っただけだ。
始業のチャイムが鳴り、それぞれが席に着き、仕事をしに来る人を待つ。

「起立」　ガタガタッと椅子が床をこする音。
光之だけ立たない。
「礼」　無言の瞬間。上半身が空気を切る、ばさっとした音が聞こえるようだ。
光之は座ったまま、微動だにしない。
「着席」　それぞれが椅子を引き戻して座る。
ひとりだけ号令に従わない光之。じっと教師を見つめる。
三年生になってから貫いてきた態度だ。

『お前らに下げる頭は無い』

教職者？

ジャージ着てサンダル履きのお前らに、教育を語る資格はない。
ましてや、俺の進路など論外だ。
所詮、親の言いなりだろ。
中学の時もそうだった。

俺の意志は関係ない。
なら、お前らの都合を無視してもいいよな。

『君は拗ねている』
お前らはそう言う。
結構だ。俺は飴玉が貰えなくて、駄々を捏ねている訳じゃない。

2

秋晴れの土曜日の午後。
部屋の掃除と千尋を迎える準備を終え、くつろいでいる東一と光之。
ピンポーン。チャイムが鳴った。
「来たな。おー、入れよ」
出迎える東一。
「お邪魔しま〜す」
二つの可愛らしい声が重なって聞こえた。
玄関に背を向けて、ダイニングで煙草をふかしていた光之。
千尋がどんな女の子を連れてきたが気になって、立ち上がりながら振り返った。

「慶子……」

お前が来ちゃ、まずいだろ。と顔に書いてあったはずだ。
「あら、何か不満でもあるわけ？　可愛い子連れてこいって言ったの、光之でしょ」
千尋は悪戯っぽく笑い、慶子と二人顔を見合わせながら、部屋に入ってきた。
狭いダイニングを抜けて、

八畳間に落ち着いた４人。小さなテーブルを挟んで、向かい合って座った。

「差し入れ持ってきたんだ。二人で作ったんだよ」

慶子は楽しそうに、バッグからキティちゃんのお重を３つ取り出した。

唐揚げやウインナーを想像した東一と光之は、お重の中を見て驚いた。　見慣れない、美しく盛り付けられた料理を凝視して

「すげぇ～！　旨そう」

「プロが作ったみてぇだ」

と称賛の声をもらした。

慶子は得意げに微笑み

「これがね、真鯛の柚子風味のマリネで、これが豚肉の黒胡椒揚げ。ホタテ貝のオレンジ煮、デビルチキン、小海老とマンゴーのサラダ、カマンベールチーズのカナッペ、ライスコロッケだよ」

白くほっそりとした指、艶々とした爪が料理の上を踊る。

料理は、フルーツやトマト、胡瓜で仕切られた枠に上品に収まっていて、飾り切りしたラディッシュやハーブまで散らしてある。

料理から目を離さない光之が、

「こんなの作れるなら店開けるぞ。慶子と千尋の美女二人で店やったら……うぅん？　店？　って、これ親父に作ってもらったろ！

慶子」

慶子の父親は、地元の女性に人気のレストランを営んでいる。

都内のホテルやフレンチレストランで修行を積み帰郷。

肩肘張らない店構えと、洒落た料理で顧客をつかんでいる。

仕事でもプライベートでも、頑固さを発揮して、ある意味、城高でも有名な名物親父だ。

光之の突っ込みにたじろいだ慶子だが、千尋と目を合わせて、

「あたし達だって、ちゃんと作ったもんね―」

と合唱して答えた。特に最後の『ね―』には、力がこもっていた。

少しだけ頬っぺたを膨らませて、二人が光之と東一を交互に見る。なんとも、可愛らしく憎めない。
城高の『いい女ベスト5』に入る2人を目の前にして、文句などあるわけもない。ましてや、旨そうな手料理まで持参だ。
失言を認めて、ごめんなさいをしている光之に向かって、慶子は更に頬っぺたを膨らませ、唇をとんがらせて、ぐっと顔を寄せて来る。
「料理食べる前に、慶子のくちびる食べていいか？」
目の前にある慶子のピンク色に輝く唇を見ながら、光之が囁いた。
慶子はゆっくりと目をつぶり、ちょこんと顎を突き出してから顔を引いた。
瞬間、唇と唇が繋がる錯覚をした光之。からかわれている。
まだ、光之から外さない慶子の視線を避けて、後ろ手をついて天井を見上げた。
「今日ここに来たのを、亮太が知ったら怒るぜ」　慶子が来た時から気になっていたことだ。光之は続けて、
「あいつは慶子にぞっこんだからな。うまくいってるんだろう、お前達」「……うん。……まぁね」
歯切れの悪い返事、俯く姿が寂しそうだ。だが、ぱっと顔を上げて
「今日はその話はなし！　千尋のために集まったんだから、盛り上がろうよ」
しらけた空気を払い除け、明るさを取り戻そうとする慶子。
「そうだな、とっておきを用意したから乾杯しようぜ」
東一は立ち上がると、冷蔵庫の近くにいた慶子を光之の隣に追いやり、中からドン・ペリニヨンを取り出した。
「ドンペリだ」
二本並べた。
「聞いたことあるけど、飲んだことない」
千尋は興味ありそうにドンペリを見つめる。
「お父さんのお店にあるけど、『慶子には、まだ早い』って飲ませ

てくれないの。高いんだよね、これ」
東一と光之は苦笑いを浮かべ、返事をしない。「あんたら、まさか……」
千尋の突っ込みが入る。
東一はさらに冷蔵庫から、クレーム・ド・カシス、フレーズ、ペシェなどのリキュールや白ワインを次々と取り出しながら
「一昨日、千尋ん家の近くの酒屋で、ちょっとした騒ぎがあっただろう……」
そう、あった。
酒屋からの通報で駆けつけたパトカー４台。広々とした駐車場で乱闘する約３０人の阿呆ども。
けたたましいサイレンの音と、拡声器から流れる罵声。
爆音を撒き散らしながら、あっという間に逃げ去った単車と車。
聞けば、店内でも喧嘩騒ぎがあったそうだ。
平和な町のひと時の話題になった。

「あの騒ぎの元は俺達だ」
東一に、千尋と慶子の無言の視線が突き刺さる。
「名付けて、スーパーＥＥ（酒屋の名前）ドンペリ強奪作戦。オチャメな山口軍団が騒いでる隙に、ドンペリ全部。あと適当に……大成功！」
東一の隣に座る千尋と、光之の隣に座る慶子は、呆れましたとばかりに、お互いに視線を交わしている。

作戦の内容は次の様。
始めに、外で騒ぎを起こし店員の注意を外に向ける。
軍団の一人が『駐車場で大変なことが起こっていますよ』と店員を呼びに行く。
爆音と芝居の喧嘩にビックリする店員。店に戻ってきて、外の様子を他の店員に伝える。勿論、外の爆音は聞こえている。

普段の落ち着きを、少し失ったような店員達。　次に、店の中にいる約２０人がいきなり、あちこちで喧嘩を始める。
「俺はヱビスしか飲まねぇんだよ！」
「アサヒが良いに決まってるだろ！」
「譲れねえな、かかってこいっ！」
わざとらしい怒鳴り声と共に、肉を打つ音と骨がぶつかる音が、店内に飛び散る。
レジの前、ビール、ワイン、焼酎などのそれぞれのコーナーで、どつき合いが始まる。
パニックに陥る店員。修羅場と化した店内。
女の店員は、その暴力に近づけず、壁を背にして立ちすくむ。
男の店員は、喧嘩する軍団に包囲されて身動きが取れない。
ごったがえす中。背中に背負ったバッグに戦利品をぎっしり詰めた、山口、光之、東一の３人が悠々と店を後にする。
店内の喧騒を脱出した店員が山口達３人を追いかけて来るも、駐車場の軍団が通すはずがない。
パトカー到着まで、あと３分！　警察署前と、途中で張っていた軍団から連絡が入った。
ドアを開けて待ち構えていた四つ輪部隊。山口達三人と、店内からバラバラと飛び出してきた軍団をかっ拐い、ホイルスピンと共に猛ダッシュする。店の出入口で、店員の足止めをしていた単車部隊。それを見て、蜘蛛の子を散らしたように、爆音を残して去って行った。
作戦は見事成功。
補導、逮捕者ゼロ。

「まぁ、細かいことは気にするな。すべては千尋のためだ。飲もう」
ドンペリを手にした東一。瓶の口にある止め金を外し、景気良く

コルクを抜こうとした時。
「待って！　ポンッて抜いちゃだめ！　貸して」
手を伸ばす慶子。ドンペリを受け取ると、左手で包むようにコルクを押さえ、右手で瓶の底を掴んで、ゆっくり、ゆっくりと瓶底を回しながらコルクを引き抜いていく。
『シュッ……、スゥ～ッ』っと静かな音と共にコルクが抜かれた。
慶子の動作を、じっと見つめていた3人は、なぜか肩から力が抜けて、ふぅ～っと息をもらした。
「シャンパンは、誰にも気づかれることなく抜くべし！　お父さんがうるさく言うの。音をたてちゃ駄目なんだって、泡立ちが悪くなるから。今の開け方は６０点くらいかな。みんなが見てるから緊張しちゃった。はい、千尋。どうぞ」
慶子の慣れた手つきでシャンパンが注がれた。
「千尋の明るい未来に」
東一がグラスを上げて、乾杯。力強く爽やかな液体が、シュワシュワと喉を通った。
東一の狭いアパート。派手な作戦で盗んできた酒と、愛情のこもった料理を囲んで１８才の男と女の宴が始まった。
しがらみのない東一と千尋は、みるみる楽しげにじゃれ合いだした。

慶子の都合　その２　絡みだした心と身体（前書き）

城高ベスト５に入る美女ふたり、千尋と慶子。こぼんばかりの欲求をストレートに表す東一。斜に構えているが、千尋と東一のじゃれ合う姿に触発される光之。男ふたり、女ふたり。悩める１８才の宴が始まった。

慶子の都合　その２　絡みだした心と身体

一本目のドンペリはすぐに空き二本目に。さっきの開け方に納得のいかない慶子がリベンジする。

「泡を騙してコルクを抜くの」

シャンパンは泡が命。儚い泡の素である炭酸ガスを逃がさないように、静かに抜かなければならない。だから、グラスもワイングラスをダイエットさせた様な口が狭く細長いフルートグラスが、泡持ちが良くシャンパンには適している。

音も無くコルクを抜き、納得の表情を浮かべた慶子。上手に抜けたご褒美に『注いで』と光之にボトルを渡した。注がれたシャンパンをピンク色の口に運び、白い喉を見せて飲む慶子。

微かな色気がこぼれた。

めったに飲めない酒なので、今飲んでおきたいという気持ちが働くのか、皆のペースが早い。料理も旨い。

二十本以上あったドンペリは、強奪作戦に参加した奴ら五十人に振る舞うため、二本残してあとは全部山口邸に行った。さぞ景気良く抜かれたことだろう。

日本酒よりアルコール度数の高いシャンパン。二本で約１．５ｌ。少し酔いが回り始める。

「だから別れたの。高校生だよ、私達。冷めちゃった」

千尋の元彼は、二年後に結婚してくれと大胆な言葉を吐いた。地元では大手の部類に入る建設会社の御曹司。二年制の専門学校を卒業したら。と千尋にプロポーズをした。

高校生のプロポーズ。自分の将来が確定している安心感、又は閉塞感からなのか。真に千尋を愛しているからなのか。その理由を確かめもせず断った千尋。例え誰であろうと、今は結婚など考えられない。高校生の自分にとって、あまりにも非現実的なことだ。

「私の、恋と浪漫に溢れる人生はこれからだよ！」

カシスオレンジを片手に千尋は語る。
「ふ～ん。で、あいつが結婚してくれって言わなかったら、今どうなってた？」
ビールを飲みながら東一が聞く。
「別れてないよ。でも、卒業したら終わりにするつもりだったんだ」
「その辺のことを心配したんだろうな。あと半年で卒業だ。皆、学校っていう巣から離れていく。散り散りにな。そんな中であいつは、千尋だけは手放したくなかったのかもな？　結果は自爆だったけど」
東一は、千尋をからかうように顔をぐっと近づける。
「オーバーだよ。なにも外国に行くわけじゃないんだか……あっ、ごめん」
東一から視線を外し、俯く千尋。
「俺のこと気にしてんのか？　別に問題ない。気にすんなよ」
「う、うん」
俯いたまま返事をする千尋。
卒業と共に、北朝鮮に帰る東一。
『俺のオヤジは北朝鮮のスパイだ』
とあっけらかんとして言う。本当かどうかは不明だが。『北朝鮮人として差別するなら掛かってこい』という、東一の意思表示なのだ。そして、何かと一線を画する防御線でもある。
ニュースで聞きかじる北朝鮮の情報は知らなくもないが、明るい印象は無い。独裁者、特権階級、餓死、好戦的、そしてアンチ日本。
今、目の前に居る東一からは、微塵も感じることのない負のイメージばかりだ。北朝鮮の本質は分からないが、そんな国に東一は帰る。
光之は東一との四年の付き合いで、その不安や祖国を否定する言葉を聞いたことがない。
だから、聞かない。いや、凝り固まった負のイメージに怖じ気づいて、聞けないのかもしれない。

あえて口にすれば、東一の祖国を侮辱することになりかねない。だが、それは言い訳だろう。
光之が、幾度となく繰り返した自問自答だった。

「もしかして、千尋の具合が良すぎて離れられないとか？　ちょっと俺に試させてみろよ」
暗くなりかけた雰囲気を壊すように東一が、真横で俯いている千尋に迫る。右手を千尋の腰にまわし力を込めて引き寄せ、お互いをより近づけようとする。千尋は慌てた様子もなく、観音様のように右手を開いて東一の顔を遮る。
「永遠のバージンに向かって、失礼だぞ」
自ら顔を近づける東一に、にっこり笑って人差し指で額を軽く押した後。
『パスッ』妙な軽い音がした。
千尋の左裏拳が東一の鳩尾を捉えた。
「いてっ」
さして痛がるふうでもなく、東一は千尋の肩に回していた左手を下ろして、千尋の拳を握る。
「こらこら、反則だぞ。凶器を使っちゃ駄目じゃないか」
「どっちが反則なわけ？　可憐な乙女の貞操を奪おうとする野獣さん」
おとぼけキャラに見られがちな千尋。実はこれで空手の有段者。
千尋の父は『剛柔流』の看板を掲げた道場主。門下生もかなり居る。母親は『糸東流』六段の強者。空手がきっかけで知り合ったのではなく、付き合いだしてから、お互いが空手をしている事を知ったそうだ。些細なことでムキになって、一日に一回は喧嘩をする仲良し夫婦。しかも喧嘩は道場でする変な夫婦。二人して息を切らし道場から帰ってくると、すっかり仲直り。争いの元など何処へやらだ。千尋はそんな空手夫婦の元で育った、明るく奔放な女の子だ。

幼い頃は道場に集まる門下生にかまってもらいたくて、ぶかぶかの胴着を引きずりながら邪魔ばかりしていた。見かねた父親が、ちゃんと稽古したら、おもいきり遊んで良し！　と諭し、その言葉に釣られて空手を始めた。

きちんとした胴着は貰ったが、大人と同じ稽古など出来ないので、じっと待つ時もあった。

人見知りしない、良く笑う子なので、門下生から『ちー坊』と呼ばれ可愛がられた。昼の稽古が終わってからは、文字通り思いっきり遊んだ。道場狭しと皆で鬼ごっこをしたり、父親がするお馬さんに乗って得意になったりして、散々駆け回った後『ちー坊は　もう　ちゅかれたから　寝るね』そう言ってそのまま寝てしまうほどだった。

時には、女性の門下生と外に出て草花を摘んでリースを作ったりと、千尋にとって道場は素敵な遊び場のひとつだった。

物心がつき、女へと体か変化を始めた時。千尋は空手を続けることに抵抗を感じた。

無邪気な遊びから卒業して、意識の中に女としての『美』が芽生え、どうしても空手と結び付かない。

だが、一度始めたこと。何か徴(しるし)を残したい。そう思って初段を目指し、中学の時に黒帯を得た。

その黒帯を手にした時、外見にとらわれていた自分に気付き、千尋はひとり笑った。

そして今でも、緩いペースではあるが続けている。

東一は、お構いなしに千尋に迫る。

「手負いの野獣は、凶暴になるぅ―。そして愛の力は、空手になんか負けないぞ―」

とぼけたことを言って、千尋に抱きつく。

「言葉だけの愛に、力なんか無いよ―」

千尋は軽く頭を振ると、おでこが東一の鼻の頭をを直撃。音はしないがこれは痛い。後ろにのけ反り、鼻をおさえて絨毯に這いつくばる。
「大袈裟なんだから。そんなに強くやってないでしょ」
千尋は、ニコニコしながら東一に声をかける。東一は、鼻をおさえたまま動かない。無言は本当に痛い証かも知れない。
「ちょっと、いい加減にしなさいよ。みえみえの芝居だよ」
手をついて、上体を東一に寄せるようにして話しかける千尋。
東一は、すかさず手を広げて千尋を抱き締めた。
「やっと俺の胸に飛び込んで来てくれたね、千尋〜」
「アホか！　馬鹿！　離せ！」
じたばたする千尋。光之と慶子は、声を出して笑っている。
笑ってはいるが、仲睦まじい東一と千尋を見て光之は思う。
『こんなに仲良かったか？』
酒が入っているとはいえ、展開が早すぎる。
光之の知る限りでは想像できない、今の二人のじゃれ合い方だ。男と女だから、きっかけさえあれば不思議などないが。
それとも、二人がいちゃいちゃしている事に、羨望と嫉妬を感じているのか。
「なんかイメージ違うな」
光之は呟く。
「えっ？　なに」
慶子が聞き返してくる。
「いや。こいつらこんなに仲良かったのか、と思ってさ」
「そうだよね。なんか不思議。私も知らなかったよ」
「お前ら、いつからそんな仲になったんだ？　なんなら布団敷こうか」
二人の世界に入り込みつつある東一と千尋に突っ込みを入れる光之。
「今からだ」

いとも簡単に東一が答える。反撃をしない千尋と、後はご自由に状態だ。放っておこう。

かたや、光之と慶子の間にはごく普通の距離がある。光之は目の前の二人を見ているうちに、慶子を意識せずにはいられなくなる。ビールを飲みながら、ゆっくりと首を回して慶子を見る。

肩まで伸びた、毛先にゆるくウェーブのかかった栗色の髪。長いまつ毛と緑がかった瞳。思わず押してしまいたくなるような愛らしい鼻。白磁を思わせる肌にピンク色に光る唇。女性的なふくよかさを全身に纏い、ハトとあだ名されるほどの鳩胸に目が止まる。

こいつは、亮太の彼女だ。

亮太とは夏休みに湘南旅行った。男四人のむさいナンパ失敗旅行だった。そして来月には、その四人でアコスティックライヴをやる。

東一と千尋は起き上がったものの、肩を寄せてじゃれあっている。二人きりにしてあげるべきだろう。光之は、慶子と共にダイニングに移ることにした。

「酒は取りに来るからな。それから、千尋。あんまり悶えるなよ。筒抜けだからな。東一もイクとかデルなんて言うなよ、聞きたくねぇから」

がさごそと冷蔵庫から酒を引っ張り出しながら、光之は二人に背を向けて喋る。

アコーディオンカーテンが閉まり、東一と千尋の空間とダイニングは仕切られた。

すぐさま『でるぅ～』『いくっ～』と東一の声がする。

『そんなとこ触っちゃ声デちゃうよ～』

茶目っ気たっぷりの千尋の声。二人きりになった不安はないようだ。

少しでも東一と千尋の空間から遠ざかろうと、アコーディオンカーテンから離れた窓際に座った光之と慶子。

二人のふざけた声に笑いながら、お互いの顔を見る。隣り合って座った距離がすこぶる近い。
気を利かせて東一と千尋を二人きりにしたが、こちらも二人きりになったことに気がついた。
お互い慌て視線を外し、テーブルの上の飲み物を見る。何か飲もうとしたがグラスがない。向こうの部屋に忘れてきた。
「グラス忘れてきちゃったね」
立ち上がり、流しに向かう慶子。
くびれた腰に悩ましさを感じる光之。慶子が振り向く前に、やっと視線を外した。
グラスを光之の前に置いて、
「なに飲む？」
隣に座って、光之の顔を覗き込みながら慶子が聞く。
慶子の体から漂う、甘く心地良い香りに脳天が痺れる。慶子は無防備に顔を近づけている。手を伸ばしてそっと引き寄せれば、何の抵抗もなくお互いの唇は重なりそうだ。
だが、その僅かな距離は遠く、埋めてはならない距離なのだ・・・が。
向こうの空間からは、ベルトを外す音や衣擦れの音が聞こえる。
見えないだけに、余計妄想が膨らむ。男と女がひとつに繋がる姿が頭の中に浮かび上がる。
目の前には慶子。心地良い香りに痺れ、酔いも手伝って光之の理性が壊れだす。
愛くるしい慶子の顔が眩しく、どんどんとその光の中に吸い寄せられていく。
緑色の瞳から唇に視点が移る。その柔らかな部分の重ね合い。そしてその先の行為へ、猛烈な衝動が光之を襲う。
『このままじゃ、駄目だ』
微かに残る理性が囁いた。

光之の熱くたぎる視線を真正面から受けている慶子。
光之が放つ強い肉欲を感じて、高まる鼓動を抑えられない。
ドキドキとする音が頭の中まで聞こえてくる。
浅くて早い呼吸しかできなくなり、息が苦しい。過呼吸なのだ。
深呼吸を何度かすれば治るのだが。そんな事をする余裕も考えも無い。
慶子は、浅い呼吸の度に上下する胸を見られるのが恥ずかしくなり、視線を落とし少し前屈みになる。
すると、光之に全身を包み込まれたような錯覚に落ちた。
光之の欲望を受け入れ、かしずく自分の姿を見た。光之に抱かれる自分の姿が浮ぶ。
このまま抱きしめられたら、心臓が破裂してしまうかも知れない。
その時、椅子がガタッと鳴った。
慶子はびくっとして、とっさに両手で肩をきつく抱き、顔を上げた。
光之はサイドボードの方へ歩きだしていた。
慶子は、深くゆっくりとゆっくりと、息を吐き出した。
「なんか強い酒が飲みたくなった」
光之はサイドボードの中からウイスキーを取り出し、ラッパ飲みしてから「慶子も飲むか」と聞いた。
慶子は立ち上がると、ゆっくりと光之の後ろに回った。
「少しの間、このままで居させて」
と光之の肩に手を乗せて、頬を寄せた。

「好きだったのに」
掠れたような慶子の声。光之には聞き取れない、小さな声。
「えっ？　なに」
と聞き返すが、返事はない。
目を閉じて、そっと寄り添う慶子。

『この想いを光之に注ぎ込むことが出来たなら』　今まで溜め込んでいた気持ちをテレパシーで伝えたい。
そんな願いを込めて体を寄せる。

肩に乗せた手に、少し力がこもった。

亮太と付き合い始めて二ヶ月、後悔しない日はなかった。
好きでも嫌いでもない相手と付き合う。しかし、想いの届かない好きな人が別にいる。付き合っている相手には言えない事だ。
間接的に、光之が慶子を恋愛対象として見ていないことを知ってしまった。その砕かれた気持ちをなんとかしたくて、亮太と付き合い始めた。光之の感情を知る事と、亮太からの告白はほぼ同時だった。
胸の内を語ることの出来ない相手に、癒しだけを求める都合の良さ。それに気づかないほど慶子は落胆していた。
亮太は楽しい男だ。笑えるネタを見つけてきては、慶子に嬉々として聞かせる。ツボにはまって笑う慶子を見て、亮太も幸せそうに笑う。そんな楽しいひと時も過ごした。だから、映画を見たり、食事をしたり、お互いの家に遊びに行ったりを、抵抗なく出来ると思った。いや、思いたかった。
だが、ひとり部屋で佇む時に、浮かんでくるのは光之。どうしても出てきてしまう光之。何も要らない。ただ、光之のそばに居たい。言葉も要らない。そっと肩を抱いて欲しい。
光之を求め、長い妄想にひたる。
亮太から毎日送られてくるメール。
『好きだよ』と最後の一文に必ず入っている。慶子はそれに対して、同じ言葉を返せない。
罪悪感にかられ、携帯を放り投げる。
『ひどい女だ』と呟き、さらに落ち込む。
何度後悔しても現実は変わらない。

亮太と付き合いだした事。
光之に、なんのアクションも起こさずに諦めてしまった事。
そして、最悪の行動を取った自分。
ごめんなさいをして別れるべきだ。でも、理由を聞かれた時に、なんと答えればいいのか。
ありのままを伝えることは、恐ろしくて出来ない。都合のいい嘘など、どれも薄っぺらに感じてしまう。
伝える事も、伝えずにこのまま過ごす事も、どちらも残酷で身勝手な事だとは分かっている。
勇気を出して！　答えはひとつ！　と自分を叱咤して、携帯の液晶画面を睨む。亮太の番号……。
だが出来ない。携帯が手からポトリと落ちる。そして、涙も。
光之と亮太の間に付き合いがなければ。
光之への想いを、これほどまで強く引きずっていなければ、悩むことはなかった。

そして今、万感の想いを込めて光之に体を寄せる慶子。

『辛いよ、切ないよ！　ねえ、分かる？　光之。私の気持ち』
涙が頬をつたう。この瞬間の嬉しさにひたる涙なのか。それとも、後悔と自己嫌悪から流れる涙なのか。慶子には分からなかった。
ただ、今流す涙は、亮太を少しずつ消していく。

『あの時、なぜ電話に出たの？　なぜ　なぜ？　どうして？』
抱き続ける光之への疑問。その答えを聞いたところで、何も変わらない。
悲しさと、腹立ち紛れに
「ばか。光之のばか」
光之の肩を強く掴み慶子は言葉をぶつけた。

ウイスキーを片手に、突っ立っている光之。慶子の不可解な行動に戸惑っている。
ふんわりと寄りかかっている慶子。だが、次第に密着の度合いが高まり、肩を掴む手にも力がこもってくる。
「どうしたんだよ、慶子」
後ろを見やるように聞くが、返事は返ってこない。
さっき感じた欲望は少し治まったものの、これほど密着されては下半身が無条件に反応してしまう。自分でも持て余す、若く溢れる性欲。治まるまで放っておくしかない。
光之は慶子の行動の意味を考える。
だか、何をどう考えていいのか正直分からない。
慶子との接点が少なすぎて、思い当たる節がない。はたから見ると、別れを惜しむ恋人同士？　などと思ってみるが……。
寄り添うことで、何かしらの癒しになっているのか。悲しい事でもあったのだろうか。それとも、からかわれているだけなのか。分からない。
光之は、亮太の存在が気にかかる。だが、こんな状況が続けばどうなることか。隣が隣なのだ。
会話のない光之と慶子。聞こえるのは、隣から漏れる音だけ。

肌と肌が擦れ合う音が、これ程大きなものだとは知らなかった。
絨毯の上を動く二人。　重なり合う音が状況を物語る。
何かを舐める、そして吸う音。
そこにとどまる時間の長さや離れる時の音で、『唇』か『胸の膨らみ』か、或は『他のどこか』が、手に取る様に分かる。
舌の動きが粘着性のある音をたてる、吸う。そして余韻を残して離れていく。
千尋は声を出さないように耐えていることだろう。だが、その呼

吸までは隠せない。高まる快感と共に、息づかいは荒くなる。
今まさに貪り合っている二人が、薄っぺらなカーテンの向こうにいる。　堪えきれずに漏らす千尋の喘ぎ声に、光之の自制心はついに壊れた。
『もう我慢できない！』　ウイスキーをぐっと飲み、欲望をむき出しにしようとした瞬間。肩をぐっと掴まれ、
「ばか。光之のばか」
光之の肉欲を見透かしたように、慶子が言葉を発した。
東一と千尋に意識を奪われていた光之。ハッとして振り返ると、慶子は泣いている。
「どうしたんだよ！」
潤んだ瞳、流れる涙。その美しさに心を奪われた。
次の言葉が出てこない。

「ばか！」
今度は、真正面から光之に言葉を浴びせ、慶子は光之の胸に飛び込んだ。
ほとばしる肉欲に身を委ねた光之。慶子の涙に驚きはしたが、もう躊躇しない。慶子をぐっと抱きしめた。左手を慶子の顎に添え、ほんの少し力を入れると慶子の顔が上を向く。唇と唇。軽い触れ合いから、絡み付くように重なる。そこが目的地であったかの如く、光之は慶子の唇を、舌を激しく求める。背中に回した手に力を込めて、慶子を更に引き寄せる。二人の間で潰れる慶子の豊かな胸。怒起した物を下腹部に押し付け、右手で慶子の臀部をまさぐる。堪えていた欲情が堰を切って溢れ出した。

光之のあまりに激しい抱擁に、息が詰まる慶子。苦しくて息が出来ない。背中に回した手を握り、光之の背中をトントンと叩いた。
慶子の異様に気付いた光之。力を抜いた。
「苦しいよ。もっと優しくして……」

恥ずかしそうに、光之の胸に顔をうめて慶子が囁く。
「ごめん……」
爆発した欲望に支配された光之。自身の乱暴さに気付き、そっと慶子を抱いた。
「ごめんね」
もう一度言い、唇を求めた。激しさは消え、濃厚な繋がりが始まる。舌先が絡み合い、お互いの唾液が往き来する。自然と光之の手が慶子の胸に。細やかな抵抗はあったが、手の動きに反応を見せ始める慶子。光之は、キャミソールとシャツの上からブラのホックを外した。ハッとする慶子。身を硬くして光之を見る。
「ここじゃ、いや」
上目遣いに訴える。
夕暮れにはまだ早く、外は明るい。ダイニングに射し込む日の光は、その力を失っていない。時折聞こえる鳥の鳴き声と、秋の爽やかな風が、少しだけ開いた窓から舞い込む。
この明るい日射しの中、素肌を見られることに恥じらいを感じる慶子。

「飲み直すか？」
「うん」
仲良く、肩と肩をくっけて座った。光之はウイスキーのロックを、慶子はキールを手に改めて乾杯。一口飲むと、光之は慶子にぐっと顔を寄せて唇を求める。酒の残り香を感じる。
シャツの裾からそっと手を差し入れて、慶子の胸の膨らみに触れる。素早く払い除けられ
「こらっ！」
と、たしなめられる。慶子は微笑んでいる。再度重なる唇。ようやく離れて、カランと音をたててグラスを空けた。
「光之、お酒強いね」

ウイスキーを注ぎながら、慶子は興味ありげに聞く。
「山口さん家で鍛えられたからな」
「山口さん家？」
「山麓の不夜城、聞いたことあるだろ」
ある。たぶん……。ろくでもない所だと。真面目君と中途半端にいきがる輩には、無縁な所らしい。
女としての貞操を守りたいならば、決して近付いてはならない所。夜な夜な繰り広げられる狂宴。放埒な男共と、いかれた女達が集まる常軌を離脱した場所。やくざも常に居る。というか、山口さんがやくざなのだ。と、噂されている所。
光之も東一も、そこに入り浸っているらしい。
城高にも、悪ぶった連中はいる。学年を越えた派閥を作り、ヌシの様な顔をしている。生意気な新入生や、気に入らない奴は当然絞められる。だがなぜか、光之と東一だけには手を出さない。
それなりの理由があるのだろう。
光之と東一も、そんな輩に興味を示さない。仲が悪いわけでもないが。

慶子は、光之が違う世界に居るような気がして、寂しくなった。何故かぼんやりと、入学式の記憶が蘇る。

退屈の中で、粛々と進められる入学式。その入学式に遅れて入ってきた光之と東一。堂々と、ステージ脇の入り口から扉を蹴飛ばして入ってきた。校長の無駄なお話しが中断され、ただでさえ静かな体育館が、更に静まりかえる。
見れば、時代遅れのくるぶしまであるヨウランを着て、サングラスを掛け、ぱっ金々のパンチパーマのヅラを被った二人。
壇上の校長、壁際に座る教師、在校生、新入生、そして、入学式に駆け付けた父兄を、順番に上から目線で見回し、
「一年！……何組だったっけ？」

でかい声を張り上げたはいいが、隣の光之に問いかける東一。
「知るかよ」
光之の返事に「そうだな」と、ひとり合点して、改めて声を張り上げる。
「金　東一。一年！朝鮮人だ。よろしく」
「同じく、一年。伊達　光之！　日本人。よろしく」
二人はもう一度、静まりかえった会場をゆっくりと見回して「誰も笑わねぇ」
「だせぇな」
そう言って出ていった。
ざわめきと共に数人の男性教師が、二人の後を追いかけた。
慶子に強烈な第一印象が植え付けられた。
田舎ではあるが、市内で一番の進学校として認識されている城山高校。まさか、こんな阿呆が居るとは。

入学式のイメージと山麓の不夜城が重なり、光之を遠く感じる慶子。自ら光之に抱きついた。

『も～い～かい？』
『まぁ～だだよ』
幼い頃唱えたかくれんぼのフレーズが慶子の頭にこだまする。そして、
『も～い～よ』
すべてを光之に預けた。

3

次の日。自分の部屋で、ある決心をした慶子。
自分のためと、亮太の気持ちを傷つけないために、亮太を好きに

なる努力はした。だがもう、そんな自分とさよならしようと。
亮太を、これ以上振り回すわけにはいかない。と言うより、弄ぶと言ったほうが合っているのかも知れない。
亮太の誠実さと、慶子を想う気持ちはよく分かる。
お互いが、同じだけの愛情や感情を持って接し合うなど、不可能。
どんな時でも、一方の想いのほうが強く、重い。だが最低限の共有する感情があるから、今がある。
しかし、慶子には亮太と共有する感情がない。二歩も三歩も下がって亮太を見てしまう。

慶子は、亮太を顧みて自分に問い掛ける。

問い・好きな人が出来たらどうする？

我慢できないくらい好きなら、気持ちを伝えたい。そして、受け入れて欲しいと思う。同じように、自分のことを好きであって欲しいと願うわ。

問い・仮に、受け入れてくれたら？

飛び上がって喜ぶわ！

問い・そのあとは？

なに？　そのあとって。
好きだから、一緒に居たいよ。嫌われるようなこと、しないように気をつけるし。

問い・違う違う。嬉しさに舞い上がって『相手も私と同じ気持ちだ』と思い込んでいないかって、聞いているのよ。

……。

今日も晴れ渡る空。その暖かさで身を包んでくれるようなお日様。
慶子は、閉めきっていた窓をいっぱいに開け、身を乗り出して伸びをした。
お日様にこんにちはして、ゆっくりと深呼吸する。新鮮な冷たい空気が身体中を駆けめぐり、とても気持ちがいい。
久しぶりに味わう爽快感。

もう一度息を深く吸い込む。
もつれた血管が息を吹き返した。
そして、ゆっくりと息を吐き出す。
慶子の息は、秋風に乗って遠く果てしないところに流れていった。

明るい笑顔を取り戻した慶子に、雀がチュンチュンと語りかけた。
「ありがとう、雀さん。あたし頑張るよ」

続く

光之の都合　その１　脆い心（前書き）

未だに進路を決めない光之。慶子との一線を越えて、新たな火種を抱えることに。光之は、見失った自分を取り戻すことが出来るのか。

音楽教師の音美は、陽光を見て衝撃を受ける。忘れいたはずの過去が蘇り、音美の心を揺さぶる。教師と生徒。音美の葛藤が始まった。

光之の都合　その１　脆い心

第２章　光之の都合

１

慶子、千尋、そして光之は、東一のアパートで一夜を過ごした。

ひんやりした空気と太陽の光が混じり合う日曜日の朝。光之は慶子を家の近くまで送った。

ヘルメットを外し、単車のホルダーに引っかける慶子。頭を軽く振り、髪の毛を手櫛で整える。朝日を浴びた栗色の髪がキラキラと光って眩しい。

「ありがとう。またね」　慶子は、アクセルを握る光之の右手にそっと手をのせた。

光之は、慶子の手をポンポンと叩き

「ああ、またな」

左手で『じゃあな』のしぐさをして、アクセルを開けた。

慶子は、光之をしずかに見送り家に向う。その足取りは軽かった。そして、しっかりとしていた。

澄みきった朝の空気とは裏腹に、光之の中にドロリとした何かがうごめき出した。

またな？

また会ってどうする気だ。

昨日の続きをするのか？

シャレにならんだろ。　もう遅いんだよ。

覚悟しておけよ。

自問自答して、そんな言葉が頭の中に響く。

冷気を切り裂いて単車を走らせる。身体中にぶつかる風。だが、その風の冷たさで、どろどろとした胸の中を冷やすことは出来ない。

家に着いた光之。

「ただいま」

無機質を思わせる一言。

「おかえり」

感情のこもらない言葉。

伊達家は、光之と姉ひとり、両親と祖父母の６人家族。２つ年上の姉は、都内の私立大で学んでいる。目標があって望んだ大学。充実したキャンパスライフを送っていることだろう。

田舎の典型的といえる兼業農家で育った光之。両親とも働きに出て、その合間に稲作をする。稲作が始まると、休みも　朝も　晩も、関係無く働く親。

中学出の父親は、会社で学歴を意識させられる何かがあったらしく、二人の子供には強く大学進学を望んだ。そして、母親も賛成した。だが、口数の少ない父親の胸の内は、光之には届いていない。

中学までは成績優秀だった光之。志望高校を決める時に、親と子の間に亀裂が走った。

大学進学を前提にした親と教師。高校進学はするが、その後、市役所、農協、または銀行のどれかに就職したいと主張する光之。

裕福とも貧乏とも無縁な光之の家庭。だが、子供二人を私立大に通わせることは、大きな負担だ。楽ではない。

幼い頃から、懸命に働く両親と祖父母の姿を見てきた光之。当然、手伝いもした。そんな家族のために、高校卒業後に安定した職場に就職する。夢見た職業もあるが、それは夢でしかない。

光之は叫びたかった。だが、何をどう叫んでいいのか……。ありすぎて、わからない。

勉強が好きなわけじゃない。テストで自分なりのいい点数が取れることが、面白いだけだった。百点を取るとか、学年のトップになりたい。そんなことは考えたこともない。一夜漬けのテスト勉強で、８０点９０点が取れる。それで満足。『勉強なんてそんなもんだ』と思っていた。だから、自分の蓄積のない学力は充分に承知している。テストが終わった瞬間に、綺麗さっぱり忘れる。

それを、あと7年も続けるなど不可能。だが、あと3年ならなんとかなる。多分、誤魔化せる。

『こんな俺の、どこがどう優秀なんだ？　俺のことを勘違いしないでくれ！』

お前は、この家の跡取りだ。そう言われ続けて育ってきた。働いて、代々続いたこの家を守る。　だから、勉強などもう勘弁して欲しい。

これ以上、勝手に押し付けられた人間から、頭ごなしに何かを詰め込まれるのは耐えられない。教育という名の暴力だ。

だが、世の中の仕組みがそうなら仕方ない。諦める。『押し込まれた記号の羅列』それを記憶する力が、判断基準だということも受け入れる。

しかし、俺がその力を維持できるのはあと3年。

それ以上は無理だ。

生活のためだけに、教鞭を取っているとしか思えない輩には従えない。俺は、商品でもサルプルでもない。子供だと見下して、人生の先輩ぶるのは止めてくれ。

頼むから、優秀と勘違いされているうちに就職させてくれ。これまで頑張って育ててくれた家族のために。

そんな決断をあっさりと否定された。光之の内面を探ることなく、バッサリと。

「君は優秀だ。まだまだ伸びる可能性がある。親御さんの言う通りに、進学校に行って大学を目指すべきだ」

「馬鹿野郎！」

以来、光之は心を閉ざした。勉強などするわけがない。

どうでもいい。なんとでもなれ。諦めて城高を受験した。結果は、合格。

学力の蓄積は無いと思っていたが、辛うじて残っていたらしい。予備タンクまで使いきって、すっからかん。もうこれからは、光之のタンクを満たす学問はない。卒業するだけだ。入った以上出なければ。遊園地のお化け屋敷と同じだ。

親に、教師に反抗はしたものの、受験して落ちたらカッコ悪い。そんな虚栄心も働いたのかも知れない。

相変わらず、大学進学の路線は変わっていない。

進路とは別な話だが。今、光之は東京に強く惹かれている。テレビでしか見たことのなかった東京。

幼い頃、親子４人で上野動物園に行ったことがあるが、今では入り口にいた鳩しか覚えていない。

今年の夏、湘南旅行の際に通りすがった東京。まるで未知の世界だった。人や物が多すぎて圧倒されてしまった。駅で乗り換えひとつするにしても、路線が多くてどこに行って良いのかわからない。

田舎者を痛感したが、同時に何か得体の知らない魅力に取り付かれた。好奇心、まさにそれだ。自分を抑圧する壁をぶち壊してくれる。自分を解き放つ何かがある。

渋谷、新宿、池袋。沢山の地名があるが、今の光之にとってそれら全てが東京なのだ。

憧れの地。建ち並ぶ高層ビル。縦横無尽に伸びる道路。うごめく人々。猛烈な電力を消費して作られた美しい夜景。

山々に囲まれて、まるで時間が止まっているようなのどかな風景

にはない、強烈な刺激と魅力を感じている光之。
『俺は、あそこに行ったら帰って来ない』

就職は頑として、受け入れてくれない。仮に許されても、もう、以前に求めた職場を望むことは無理だろう。

『こんなオツムで入れる大学があるのかい。仮にあっても、それがなんだ？　その先にあるものはなんだ』

父は、朝帰りをした光之を咎めるでもなく、ただ視線を送るのみ。殺伐とした空気の中、自分の部屋に消える光之。
部屋に入ると、CDをかけてベッドに寄りかかる。セックスピストルズのゴッド　セーブ　ザ　クィーンが流れる。
ｎｏ　ｆｕｔｕｒｅ　ｎｏ　ｆｕｔｕｒｅ
ｎｏ　ｆｕｔｕｒｅ　ｆｏｒ　ｙｏｕ.

お前に未来はない。

不毛の抵抗は自らを窮地に追い込むだけ。

良いことなんか、ひとつもありゃしない。

だが、俺には俺の意地がある。

敷かれたレールは変えられない。

でもその中で、懸命にあがく姿を、あんた達に焼き着けてやるぜ。

だから、なんとでも言ってくれ。

好きなように罵声を浴びせれば良いさ。

とことん甘えるぜ。

良い子ぶった仮面は、もう被らない。

目をつぶり、マットレスに頭を預けて、流れるパンクロックを聞いている光之。携帯が鳴った。

なんだよ、こんな朝っぱらに。毒づいてから液晶画面を見ると『陽光(ようこう)』の文字が。苦笑いして出る。

「よう、どうした」

「悪い。迎えに来てくれないか？」

「どこに」

「音美(おとみ)のアパートに」

「誰だ？　音美って」

「音楽教師の姉崎だよ。アッチェだよ」

「ああっ、アッチェか。音美っていうのか。ずいぶんくだけた呼び方するけど……。お前、遂にやったか？」

「まぁ、いいじゃねえか。その話はあとで。頼む、光之。迎えに来てくれ」

「わかった。行くよ」

「悪いな。待ってる」

電話が切れた。

「音美ねぇ～。陽光もよくやるよ」

姉崎音美。城山高校の音楽教師。一見ワイルド。男なら、その容姿に目がドキンと飛び出すダイナマイトバディ。でも、中身はおっちょこちょい。

しなやかな体に、女性としての膨らみと豊かさを充分に持っている。小麦色の肌と引き締まった体は、サバンナを最速で疾走する動物を思わせる。女王様として崇めたい！　そう思っている男子生徒（教師も）いるらしい。

そんなことは知るはずもない音美。おちゃめな日々を送っている。

授業中『急いで！　急いで』が口癖で、音楽用語の、急げ′を意味する、アッチェレランド′と姉崎の、あ′を引っかけてアッチェとあだ名されている。　自分の言う『急いで！　急いで！』の言葉に一番振り回されているのはアッチェ自身。生徒は、誰ひとり急がない。なぜ急ぐ必要があるのか、理解出来ない場面で発する言葉だから。意味不明にテンパって、おっちょこちょいを披露するアッチェは、可愛くて結構な人気者でもある。

アッチェとお近づきになりたいと思う男子生徒はかなり居る。その中の一人が陽光だ。

光之　東一　陽光　恭平の４人は、高校最後の学園祭で派手にぶちかまそうと、自称　城高のベストメンバーバンド「ＴＨＥ　ＢＥＳＴ」を組んだ。

放課後たまに、音楽室の奥にあるスタジオを勝手に占領して練習をする。ドラムセットやギターなど揃っていて、軽く練習するのに都合が良い。

最初アッチェは『困るんだけど』と言いながら『でも、ちょっと興味あるから聴かせて』と居座った。一人でも聴いてくれる者がいると、気合いが入る。

イギリスのロックバンド。ザ　フーのマイ　ジェネレーションをやった。

「へぇ～、意外とうまいじゃん」

意外は余計だが、悪い気はしない。調子にのって下校時間ぎりぎりまで練習した。

時計を見て

「あらっ！　もうこんな時間。帰りましょ。急いで！　急いで」
慌てて立ち上がるアッチェ。ギターとアンプをつなぐシールドに引っ掛かってけつまずいた。たたらを踏んで『てへっ』と言うと、目をクリクリさせて、舌を出して顔を上げた。
なるほど、人気があるのもわかるような……。ちょっとお馬鹿な気もするが。
練習を打ちきり『喉乾いたな』４人が口を揃えて言うと、
「うちに来る？　飲み物くらいなら、聴かせてくれたお礼にご馳走するわ」
「やった！」
瞬時に反応した陽光。遠慮なく４人で、ぞろぞろとアッチェのアパートに向う。
５分程で着いた。生活感の漂う、落ち着いた大人の女性を感じさせる部屋だ。外見から感じるワイルドさのない、清潔で質素な部屋。
「座って、座って」
何飲む？の質問に、全員が『ビール！』
「あんたら、まったく！　教師に向かってビールって言うか？　未成年君たち」
アッチェは笑いながら喋っている。
「無理ならいいんだ。他所行って飲むから」
恭平が答える。
「それも、問題発言！　どこに行って飲むつもり？　聞き捨てならないわね。でも良いわ、ビール出しちゃう。私も飲みたかったんだ。飲も飲も」　あまりにも簡単に許しを出したアッチェ。あっけにとられる４人。憩いの部屋がひとつ増えた。
以来、陽光と恭平はアッチェの部屋をちょくちょく訪ねている。

陽光を迎えに、単車を走らせる光之。『陽光、ついにやったか？　そうだったら、喋りたくてうずうずしてるだろうな。たっぷり聞

いてやるか』

2

『玄関のチャイム。あの音は嫌いなの。どれも同じでセンスないじゃん。うるさいし、びっくりするし。だから、あんた達がうちに来た時は、4ビートでドアをノックすること！　いいわね』

いかにも音楽教師らしい注文をつけたアッチェ。光之はドアの前に立ち

『コン　コン　コン　コンッ』と叩いた。

『ワン　ツー　スリー　フォー』と演奏前にドラムが刻むスティックの音をイメージして。

「オール　ライト」

朝からテンションの高いアッチェの声がして、玄関に近づいてくる気配がする。

『ついてけねぇな、まったく』光之は呟いた。

ガチャリとドアが開き、三和土にあがる。

「モーニン！　伊達君。あいつらを送ってあげて欲しいの。頼める？」

「あいつら？」

はなから陽光しか居ないと思っていた光之。足元を見ると、男物の靴が二足ある。

「おーす、光之。悪いな」

陽光の声。

「モーニン！　伊達。迎え、ご苦労」

「はぁ？　恭平か」

仲間内で光之のことを、伊達と呼ぶのは恭平しかいない。

「なんで恭平がいるんだよ？」

陽光からの、思わせ振りな電話で膨らんでいた期待。それを壊された思いが口に出た。

「いちゃ悪いのか」
奥から恭平が出てきた。
光之は、楽しみを奪った恭平に噛みついた。
「あ―悪いね。おおいに悪い！　俺はな、陽光とアッチェのツーショットを想像して、この小さな胸をときめかせながら此処に来たんだ。意味わかるな、恭平！」
恭平は、はたと気付いて頭をかいた。そして、にんまりと目の前に居るアッチェの後ろ姿を見た。
光之を正面に、恭平を背後に、二人に挟まれた形のアッチェ。『なに言ってんの？　この二人』そんな顔をしている。
光之は、アッチェを少しからかってみたくなり、恭平に問いかけた。
「恭平。お前ら、昨日此処に泊まったんだろ？」
「ああ、そうだ。３人でやるＵＮＯを極めたぜ」
恭平は光之の問いに、よどみなく答える。
「野暮な男だな、まったく！　恭平の家なら歩いてでも帰れるだろ。アッチェへの陽光の気持ちを知ってるお前が、なんでもっと気をきかせない？　普段、陽光は俺達に何て言ってる？　言ってみろ！」
突然の衝撃発言に、アッチェは答えを求めて恭平を振り返る。
『もしかして。あたしって、今……。間接的にコクられてるの？』
完全に光之に背を向けて恭平と対面しているアッチェ。空間を泳ぐ左右の手が、落ち着きの無さを物語る。
光之は右手の親指を立て、恭平に笑顔を送った。
恭平は、わざとらしくアッチェから視線を外し、あさっての方を見ながら
「伊達よぉ、俺もそこまで野暮じゃねぇぜ。当の本人がアッチェに言わねぇこと、喋れるわけねぇだろ」
そう言って、陽光を見る。
釣られて、アッチェも陽光を見る。
２人から凝視された陽光。どぎまぎを隠せない。

「まぁ、なんだ。ううんっ……。アッチェは用事があるそうだから……。その、なんだ……光之！　お、お、おくってくれ！　帰ろう」
玄関付近に居る3人の間を無理矢理かき分けて、陽光は表に飛び出していった。
残された3人。陽光の後ろ姿を追うも、閉まるドアが遮った。
言葉を失い、互いに顔を見合わせる。
「あの馬鹿、俺をわざわざ呼んどいて一人で帰る気か！」
光之は、そう言ってすぐさま陽光の後を追いかけた。
4人が2人になって、涼風以上の冷たい風がアッチェと恭平の間に吹いた。
「さ・て・と……。俺も帰るかな」
逃げるように、恭平も去っていった。
パタンと閉まったドア。ひとり残された音美。　自分の部屋なのに、無音の寂しさを感じる。
喧騒の後の虚しさ。お祭りの後の静寂。そんな感じだ。
ドアをロックして、リビングに戻る。

陽光達に、用事があるから帰って欲しい。そう言って帰りを促した。　だが、用事なんか無い。
陽光を見ていると、あの人と昔を思い出し、込み上げてくる気持ちの高まりを、抑えることが出来なかった。
私が未熟なのか、それ以上なのか。そんなことはどうでもいい。
姉崎音美。私はそれだけ。夢も希望もある、乙女というには無理がある２４歳。
今は教師。だから何？
選択肢は一つじゃないわ。スポットライトを浴びて観客に応えるの。ピアノをあきらめたわけじゃない。ホール中に響きわたる拍手。鳴り止まない拍手を浴びるのは私。そう、私。
それは、過去の妄想にすぎない。

でも、突然現れて昔を思い出させたあいつら。特に、陽光。
お前達は輝いている。憎たらしいほど、輝いている。
ガキのくせに！　ガキのくせに！　ガキの……。
「悔しいよ！　悔しいんだよ！　思い出させるな！　怖いものなんて無かったあの頃を。失う辛さを知らされたあの時を」
ポロリと涙が落ちた。
頭の中で流れる、陽光の迷いのない歌声。忠実に再現されるメロディー。たいしたことはない、高校生のコピーバンド。だが、そこには気持ちがあった。歌いたい。伝えたい。奏でたい。聴いて欲しい。俺達を見て欲しい。特別上手くはないが、原曲をはるかに越えた力がある。そう感じた。
忘れていたことなのかも……。
諦めていたことなのかも……。
涙は止まらない。
あの人が歌う姿。そして、陽光。
「なんで、いまさら私の前に現れる……。なんで……。違うのはわかってる」
やけになってテーブルを叩いた。ドンッという音と共に、カスミソウの入った一輪挿しが倒れた。入っていた水がこぼれ、虚しく横たわるカスミソウ。
「ごめんね」
鼻をすすりながらそう言って、水の入っていない花瓶をカスミソウと共におこした。テーブルから床へ流れ落ちる水。

この花は、陽光がくれたもの。なけなしのお金で買ってきた、僅かなカスミソウ。
これっぽっちの花を背中に隠し、真っ赤な顔をして音美に差し出した。交わした会話の中で、音美の好みを覚えていた陽光。
「カスミソウ……好きだったよね」
震えるカスミソウを受け取った。嬉しかった。花と陽光を交互に

見て
「ありがとう」
素直に言えた気がする。
だが、もう一度陽光の顔を直視することが出来なかった。
今はもういない、あの人の面影が陽光と重なり、音美の胸は高鳴った。同時に、陽光に傾く気持ちを抑えようとする自分が現れた。
年下とはいえ、似ている。
あっという間に、目の前からいなくなってしまったあの人に。
求めているものが過去なのか、それとも、陽光なのか。わからない。
でも、確実に陽光には惹かれている。
教師と生徒。音美の葛藤が始まる。だが、それを意識した時点で、結論は出ているのかも知れない。
女として、いや、人として誰かを好きになるのは当たり前のこと。不思議も理由もいならい。出会いには色々な形がある。これだってそのひとつにすぎない。自分の気持ちを振りかざしてみるが、あとが続かない。
どう考えても、駄目だ。
道徳、禁断、無節操。そんな言葉が陽光を遠ざける。
世間では、よくある話で済まされている教師と生徒の恋愛。ところが、いざ自分で踏み込もうとした時に、とてつもない力と、非難を浴びる覚悟が必要だと改めて知った。
『食事をしただけです』　その一言から淫らな関係を連想し、行き着くところは背徳。世間とはそんなものだ。
卒業を待てば、問題はないのかも知れない。だがそれは、二人の関係と意思の疎通があっての話。
今、何があるというのか。
なにもない。
過去の面影を追いかけている音美。事実はそれのみだ。
教師なのは、選んだ道。年上なのは、先に産まれただけ。そんな

言い訳は通用しない。　無邪気過ぎるやつらが起こす渦に、うしろ髪を引かれつつ巻き込まれていく音美。
一過性の悩みや苦しみから生まれるエネルギーを、何かにぶつけることで発散しようとしている陽光達。来年の今頃には、その悩みや苦しみは忘れていることだろう。それを知らずに、もがき苦しむ姿は、ある意味美しい。眩しく光る、今だけしか放てない輝きだから。
音楽室奥のスタジオを陽光達に犯されて以来、音美は毎日陽光を待った。
上手い下手は置いて、あの最初の日の驚愕と輝きに、音美の心は再び燃え上がった。
学校サイドから異端児として扱われいる光之と東一。そしてその中に混じって、居るはずのない人がいた。
錯覚をおこしたが、すぐに現実に戻った。死んだ人間が生き返るわけなどない。しかし、興味を持ったことは否定できない。だから、最初の日にアパートに誘った。
あの日、陽光はボイストレーニングを名目に、音美のアパートを訪ねて良いかと聞いてきた。
二人きりになった時に、毅然とした態度を取れる自信はない。誰かを連れてくるなら、と許した。
音美の都合を確認するために、アドレスと番号を教えて欲しい。陽光の申し出は成された。それ以来、毎日陽光からメールが送られてくる。
彼女と勘違いしている。そう思える内容も時にある。
音美は混乱していた。付き合って3日目に、この世を去ったあの人。音大生の時、音美の一目惚れから始まった恋。焦がれた気持ちが叶った嬉しさも束の間。あの人が消えた。なにもなくなった。繋いだ手の温もりは覚えている。でも、その先にあるはずの姿はない。
あれから4年。なにも出来なかったあの人への想いを、ひとつひとつ心のはさみで絶ち切ってきた。

なのに、なのに……。　今さら、どうして。

音美の中で、既に天秤は壊れていた。

続く

光之の都合　その１　脆い心（後書き）

どのジャンルでも、ファンタジーが人気ですね。そんな中、私の作品を読んで頂きまして、感謝です。これからは、のろのろの亀更新になると思いますが、どうぞよろしくお願いします。どんなことでも結構です。感想頂けたら幸いです。お願いします。

光之の都合　その２　はがゆい思い（前書き）

陽光を迎えに行った光之。陽光のふとした言葉。光之の中で、何かが溶け始めた。そして、アッチェの部屋での出来事は？

光之の都合　その2　はがゆい思い

音美のアパートから、別々に飛び出した3人。
道端にしゃがんで、踏み潰した靴の踵を直している陽光。
「傑作だったよ。お前の飛び出してく姿」
笑いながら、陽光の後から声をかける光之。
「おーっ、ありゃないぜ光之。勘弁してくれよ。俺が、いつもアッチェのこと話してるみたいだろ」
立ち上がり、爪先をトントンとしながら、光之に向かって言葉を返す陽光。すぐに恭平もやって来た。
「伊達！　俺一人残して逃げたな。ちょ～寒かったぜ。アッチェと俺の間に、ピュ～って風が吹いてさ」
うらめしげに光之を見る恭平。
「逃げた？　当たり前だろ。ややこしい展開はごめんだからな。逃げるさ」
涼しい顔をして光之は答える。勝ち気なところもあるアッチェ。
『ちょっと、あんた達！　いったいどういうつもり？　からかってるなら承知しないわよ！』ぐらいのことは言い出しかねない。逃げるが勝ちだ。
「あんな言い方したら、アッチェのアパートに行きづらくなるよ」
陽光は、不満げに光之を見る。
「洒落だよ、洒落。良いじゃねえか。妙に意識する、気まずい雰囲気もオツだろ」
光之には、まったくもって他人事。面白がっているだけだ。
「敵わねえな、まったく。純情な俺を、あんまりからかわないでくれ」
開き直って吐き捨てる陽光。
「純情が聞いて呆れるぜ。ヤりてえならそう言えよ。今度は、ばっちり二人っきりにしてやるからさ」

にやにやしながら恭平がつっこむ。
「おおっ、それ良いな。アッチェのアパートにみんなで押し掛けて、一人抜け、二人抜けして。陽光とアッチェ二人っきり大作戦。後は陽光の腕次第。どうよ？」
喜んだ光之は、恭平に話を持ちかける。
「また光之の大作戦が始まったよ。でも、良いね！　やろうぜ。絶対やろう」
話は決まった。
「じゃ俺、帰るわ。作戦頼むぜ」
恭平は、背中を向けて帰り始めた。
「お前に、一番難しい役やらせるからな！」
光之が、恭平の背中に向かって投げ掛ける。くるっと振り返った恭平。
「難しいのは、無理だ。じゃあな」
「わかってるよ。そんなのねぇし。じゃあな」
恭平は、のんびりと歩いて行った。陽光も手を挙げて恭平に応えた。その後、光之に向かって、更なる不満を漏らした。
「光之。頼むから、あんまりいじらないでくれ。俺は、今のまんまが良いんだ」
その台詞に驚いた光之。
「おまえさ。今時の小学生でもそんなこと言わねぇぞ。オツム大丈夫か？　あのナイスバディに、なんの魅力も感じないわけか？」
異星人でも見るような目付きで陽光を見る。
「そうじゃねぇけど……。アッチェ見てると、なんか違うんだよ。そんな目で見ちゃ駄目だって気になるんだよ」
「アホか、おまえ？　ビビってるだけだろ。心配すんな。ちゃんと段取りつけるから。任せとけよ、なっ！」
肩をポンと叩かれた陽光。はぁ～、とため息をついて、半ば諦めの表情を浮かべつつも光之に食い下がる。
「光之には、多分わからないと思う。なんか影があるんだ、アッチ

ェには。時たま、壁みたいなものを感じるよ。それ以上踏み込んで来ちゃじゃ駄目。そんなオーラ出すんだよ、アッチェは」
心なしか肩が落ちている。微妙な寂しさを醸し出す陽光。
「なんか俺のことを、無神経の塊みたいに言うねぇ～陽光君。て言うかよ、女は身を守るために、そういうオーラ出すんだよ。無防備で居たら堪らんだろ、変なのがぞろぞろ寄って来て。まともな女なら、例え好きな男でも、端っから『はい、どうぞ』なんて言って、股は開かねぇもんだ。だから、男はその壁を乗り越えて、秘密の花園にたどり着かなきゃダメなんだよ！」
光之の言うことは、解らないでもない。でも、違う。絶対違う。ヤるとかヤらない、そういう次元の話じゃないんだよ。もっと、こう……何て言うか……。ああっ、もうっ。駄目だ、上手く言葉が出てこない。だいたい、あの不夜城で、女を食い散らかしている光之に、こんな話分かれって言うほうが間違っているんだよ。羨ましいけれど。おかしいのは、お前の方なんだよ。人として欠落した部分がある。うん、ある！
急に黙り込んだ陽光を見て、光之は独白する。
「あんまり難しく考えるな。男と女、やることはひとつ。みんな同じだ。特別なことじゃない。陽光も高校三年の思い出に、アッチェと禁断の恋とやらをしてみれば良いさ。プラトニックなんて思い出引きずるだけだぜ。お前も男なら、当たって砕けろ。どのみち、あと半年でおさらばだ」
乾いた口調で喋る光之。妙に説得力を感じてしまった陽光。だが『はい。そうですね』と言う気にはならない。適当に話を合わせることにした。
「ああ、分かった。そん時は頼むよ」
その言い様に不満げな光之。陽光に一瞥をくれて、
「気合い入ってねぇな……。まっ、いっか。帰ろうぜ」
つかつかと歩き出した。
「お前、変わったな。光之」

立ち止まったまま、陽光は言葉を放った。なんの脈略もない言葉に驚いた光之。振り返って、歩み寄る。
「はぁ？　変わった？」
光之は首を傾げて陽光を見る。
「ああ、そうだ。高校に入ってから、ずっと感じていたことだ」
光之とは、小学校から同じ学校に通っている。親友とまではいかなくとも、光之の人となりは知っているつもりだった。
「人は変わるもんだ」
無表情の光之。
「何でそんなに冷めている？　何に苛ついている？　もっと明るかったはずだ。もっと真っ直ぐだった気がするよ」
なに訳のわからないことを。と、光之は思ったが。言われてみればそうかも知れない。なんとなく、肯定の言葉が口に出た。
「ああ、そうかもな」
光之は、体の中で、何かが少し溶けた気がした。喋ろうとする陽光を制して続ける。
「思い通りにいかないことを、誰かのせいにして、自分を正当化するのも、いい加減疲れるな」
思いもよらない返事に、目を見開いて光之を見つめる陽光。
「なんだそりゃ？」
陳腐な台詞を吐いた。
「そうだよ。なんだそりゃ？　だよ」
笑いながら答えた光之。
「はぁっ？　訳わかんねぇ」
陽光は鼻で笑った。

光之は心の中で呟く。

そうだよ。そんなもんだ。
そろそろ素直になるか？

でも、今さらなぁ。カッコ悪いだろう。
そこまで意地張ることでもねぇだろうに。お前の下らないプライドが邪魔してるだけだろう。そうだろう！　東京に行ってみたいなら、大学進学は願ったり叶ったりのはず。素直に認めて、行けば良いじゃねぇか。それを三年も前の事を、いつまでも根に持って、ガキみてぇにうじうじと。どんなに突っ張ったって、親がいなけりゃ生きていけないんだぞ。それとも、一人で生きてみるか？
分かってるよ、うるせえなっ。ガキだから突っ張ってんだよ！ガキだから甘えてるんだよ。大学行くのは、どの道変わらねえんだ。行きゃぁいいんだろ。今の俺でも潜り込める所はある。だから、あと半年、突っ張り通す！

単独で巣立つ力と、意思のない今。親の庇護に甘えている。それを、充分認識している光之。そこから安易に脱却出来ない現実の重さが、まざまざとのしかかる。
親は、それで良いのだろう。幾つになっても、子は子なのだ。
しかし、いつまでも、そうしてはいられない。視野の狭い子供に、将来の展望を描かせる。そして、そこに肉親と第三者の意見が加わる。まっさらなキャンパスに絵を書く。直せ。また書く。直せ。微妙なずれなら直せる。根本的なずれは直せない。無知に、未知の世界を現実にせよと、上から声が聞こえる。綺麗に描いたつもりでも、修正される。結局は庇護の力の前に屈するしかないのか。新たな発見を模索するも、少ない路線しか持っていなかった者が、それを否定され続けた。

「陽光。いっちょ、かっ飛ばすか！」
一人テンションを上げる光之。
「寒みぃから勘弁してくれ」
「まぁ、そう言うな。付き合え」
単車に向かって走り出そうとした光之。が、忘れ物を思い出した

かように、はたと立ち止まった。そして、陽光を見た。
「ところでよ、陽光。お前さ、昨日アッチェの部屋に泊まって、いったい何してたんだよ？」
陽光は、さっき伝えきれなかった気持ちを、ぶつけるように喋りだした。
「そう！　それなんだよ、それ！　金曜日にアッチェからメールが来たんだ。ほら、これっ！」
陽光は携帯を取り出して光之に見せる。
『・・・土曜日の夜中に見たい番組があるから、付き合って。絶対に！

リアルタイムで、一緒に見たいから。変な想像はするなよ！

恭平君か、誰かを連れてきてね。頼んだぞ！・・・』

「おかしなメールだ。照れまくってる」
携帯を返しながら、笑い顔の光之。
「だろう！　そう思うだろう。恭平引っ張って行ったさ。でも、なんか変だったよ。暗いっていうか……」

昨夜の出来事。

昨日は、暗くなるまで恭平の部屋で暇を潰していた陽光。
恭平は、既に音響関係の専門学校に合格している。将来は、音の演出家とも言われる『ＰＡ』になるという。プロのライヴ演奏。その音を、最高の状態で観客に伝える音響効果の仕事だ。
恭平のドラムの腕前はかなりのもので、名の知れたクラブで演奏がある時は、叩いてくれとお声が掛かる。ドラマーとしての夢も当然あったが、堅実な道を選んだ。親もうるさいことは言わなかったそうだ。

恭平の母は、見知った陽光に、晩御飯を用意した。恭平の部屋で夕食を済ませた後。
「さて、そろそろ行くか。ちょうど良い時間だ」
恭平が声をかけて立ち上がる。頷いて陽光も続く。部屋を出て階段を降りると、広いリビング。恭平は、誰とはなしに話しかける。
「東一のとこに行ってくる」
嘘をついた。
「いってらっしゃい」
軽い返事が返ってきた。
土曜日の夜に、学校の先生のアパートに行く。なんとなく不自然で言えない。ましてや、若い女だ。
本当に、東一のアパートに行ってもこの日ばかりは追い返されたはずだが。
アッチェのアパートまでは、歩いて２０分くらい。わざわざ俺達を呼んでまでして、アッチェが見たい番組はなんだ。ぶらぶらと歩きながら考える。恭平の部屋でも、新聞のテレビ欄を見て思案したが分からない。『行けば分かるさ』お互いが繰り返す同じ言葉。
アッチェのアパートに着いた。４ビートでドアをノックする。
「はーい」
ノーマルな返事が、何故か新鮮に聞こえる。ガチャガチャと、チェーンとロックを外す音。開いたドアから顔を覗かせるアッチェ。
「いらっしゃい。入って入って。時間通りだ。感心感心」
見慣れたアッチェの部屋。テレビのある居間に座る三人。既に定位置みたいなものもある。
はい、これ。と言って、滴の浮いた小さなレジ袋を差し出す陽光。途中、顔見知りの店で買った発泡酒。薄い袋は、中が透けて見える。口元を緩めて、陽光の目をじっと見返すアッチェ。
「差し入れするなら、もうちょっと、女の子が喜ぶ物にしなさい」
お礼を言って袋を受け取り、冷蔵庫に向かいながら『今日は飲ま

せないからね』と、宣言するアッチェ。
　そんなことはどうでも良い。飲みたくなったら勝手に飲む。それよりも、女の子って誰だ？　思いを口に出した二人。
「あなた達！　明日、眼医者に行ってきなさい！　そして、とびきりよく見える眼鏡を買ってきなさい。そしたら、女の子が誰か分かるはずだわ」
　腰に手を当てて、陽光を見据えるアッチェ。
「視力なら3．0だよ。バッチリ見えてますよ！」
　あかんべ～をするように答える陽光。
「ところでアッチェ、見たい番組って何？　気になるんだ。俺も陽光も」
　恭平が、クイズの答えを求めるように聞いた。
「ああっ。それはねぇ、ロックオペラ」
「はぁっ？　ロックオペラ？」

光之の都合　その３　止まらない（前書き）

昨日の事を語り合う、光之と陽光。怒りに満ちた陽光のとった行動は？

光之の都合　その３　止まらない

アッチェのいうロックオペラは、ザ　フーの四枚目のアルバム、トミーのこと。１９６９年に発売され、後に映画化やミュージカル化もされた、ザ　フーの代表作。

今日は、その特集がある。中には、陽光達が学園祭でやる曲もある。だから、それを見て勉強しろと。そして、アッチェ自身にも思い出があるから、一緒に見ろ。今日は、内緒の特別な日だから、付き合って。ということだった。

少し気が抜けた陽光だったが、フーには多いに興味がある。恭平は伝説のドラマー、壊し屋ムーンを見たい。

午後１０時から放映される番組を前に、フー談義や学園祭でウけるアクションを語り合う３人。

時計の針が日を跨いだ頃、オペラは佳境を迎えていた。

主人公のトミーは、父親が、母親の情夫を亡き者にする現場を見てしまい、三重苦に陥る。更にトミーは、従兄弟からの虐め、叔父からの性的虐待、ドラッグ漬けなどに合いながらも、医師と共に回復を目指す。目、口、耳の機能を果たさない状態で、トミーはピンボールのチャンピオンになってしまう。多くの人達から称賛され、有名人になったトミー。奇跡的に回復を果たしたトミーは、彼を注目していた人々から、カルト集団の教祖のような立場に祭り上げられる。

絶望、兆し、回復、解放。それぞれのシーンで流れる同じ曲。

僕を、見て。
僕を、感じて。
僕に、触れて。
そして、聴いて。

と歌う曲に、アッチェは思い入れがあるようだ。赤い目をして、息をつめて見ている。
トミーが、回復をしてから歌う『僕は自由』では、その赤い目から涙をこぼした。
テーブルを挟んで、アッチェの横に座る陽光は、静かにアッチェを見ている。恭平は……寝ている。
陽光には、感動というよりも、葛藤する内面を語る作品に思えた。だから、アッチェの涙には違和感がある。
ラストは、トミーを中心とした大集団が生む金に目が眩み、私腹を肥やし始めるトミーの叔父。それが原因で、集団は崩壊する。全ての人が去って行く姿が『僕を見て』と歌う曲と共に流れ、終わった。

鼻をすすりながら、ハンドタオルで目を押さえるアッチェ。顔を伏せたまま動かない。
画面だけを見ている陽光。テレビの音が虚しく聞こえる。まるで自分が泣かせたようで、動くことも憚るような空気に、陽光は参っていた。
感動の涙と、悲しみの涙の違いくらいは分かるつもりだ。アッチェは、なぜ悲しんでいる？
時間が経つのが、ひどく長く感じる。後ろ手をつき、ゆっくりと足を伸ばした時。
「ねぇ」
タオル越しのくぐもった声がした。アッチェは顔を伏せたままだ。
「なに？」
顔を向けて問い返した。
「お願いがあるの」
「う、うん」
「音美って呼んでくれない？」
「えっ！　今？」

静かな驚きの声をあげた陽光。
「そう」
陽光は戸惑い、すぐに言えない。照れもある。咳払いひとつして、
「おっ……」
声がひっくり返った。
ハンドタオルは離さずに笑う音美。陽光は、気を取り直して、唾を飲みこんで、
「おとみ」
堅さがとれない。
「もう一回」
泣きながらも先生口調の音美に、可愛さを感じた陽光。次は、明るく言えた。
「音美」
心なしか、ハンドタオルを当てる力が強くなった。陽光から顔を背けるようにして、
「ありがとう……。ごめんね」
そう言って鼻をすすり、さっと立ち上がって、寝室に行ってしまった。
ぽつねんと残された陽光。
音美が悲しむことで、部屋全体も悲しんでいるようだ。音美が寝室に消えると同時に、いつも当たり前に感じる温もりも消えた。
冷めていく、部屋の空気。理由の想像すら出来ない音美の涙。主の居ない部屋の冷たさと相まって、強い疎外感を味わった夜だった。

語り終えた陽光は、音美のアパートの方を見ていた。ひとり感傷に浸っていると、腹に一発パンチを食らった。ぐほんっ、と息を吐き出し、腹を押さえ前屈みになる。
「何すんだよ」
整わない息で抗議する陽光。

「やっぱり、お前は馬鹿だ。お前は、最高の鈍感王だよ。そんな時はなぁ、『どうしたの？　悲しい事があるなら、話してごらん』そう言って、優しく肩を抱くんだよ」
そうすることが、当たり前のように話す光之。
「違うって！　昨日のアッチェ見たら、そんなこと出来ないって！
そっとしておこう。触ったら壊れる。そう思うって、絶対！」
何でもかんでも、ヤる方向にしか行かない光之。少々うんざりしながらも、反論する陽光。平行線をたどる二人の会話は成立しない。それを察知したかように、光之は陽光から視線を外して、呟いた。
「チャンスだったのにな。塩味のキスは、蜜の味」
何を訳の分からないことを。陽光は開き直って、
「俺とお前は、違うんだよ。俺の愛のある豊かな心の中を、お前には理解できないよ」
気負った様子もなく言った。
「言ってくれるね。ところで、内緒の特別な日って何だ？　聞いたんだろ」
「ああ、聞いたよ。教えてくれなかった。泣いた訳も、その辺にあるのかもな」
昨日の疎外感を思い出し、少し寂しさを感じた。寂しい……はて？　どこかで聞いたな。
陽光の頭に、亮太が浮かんだ。
「そういえば。最近、亮太が元気ないんだ。ハト（慶子のアダ名）のことで悩んでるらしい」
突然、亮太の名前を出され、ギクリとする光之。
「へぇー。どうしてだ」
ぎこちなく喋る光之。
「あいつ等、付き合いだして2ヶ月だろ。始めの頃は、亮太舞い上がってたから、気付かなかったけど。落ち着いてきたら、ハトから好かれてる気がしない。一方通行みたいだ。って言うんだよ」
あり得るな。亮太の考えすぎだろう、とは言えない。昨日は……。

昨日。東一のアパートの狭いダイニングでは、光之と慶子の静かな攻防戦があった。
光之が不夜城の話をしていた時に、突然抱きついてきた慶子。あまりにもあっさりと胸に飛び込んできた。一瞬、面食らった光之。だが、体勢を整え、慶子を真正面に捉え、ひしと抱きしめた。交わす口づけ。手は慶子の胸に。ホックの外れたブラがずれて、服の上からは違和感がある。手を服の下に差し込もうとすると、慶子の手がそれを阻む。諦めて、慶子の髪をそっと撫でる。唇は繋がったまま、背中を、肩を、ゆっくりと撫でる光之。唇はうなじから耳を這い、優しく息を吹き掛ける。喉に息を詰まらせて、更に目を強く閉じる慶子。光之の手は腰に回り、再び素肌を求め、裾を潜る。素早く慶子の手が阻止する。光之は、顔を離して微笑む。
慶子は、やや下目遣いかいに、怒り笑いの顔をする。
「ダメだってば」
拒絶感はなく、ほんわかとした口調の慶子。その顔がまた可愛く、再び近づき合う唇。光之は慶子をぐっと引き寄せて、臀部に手を添える。徐々に内腿に迫る手。椅子に座ったまま、しっかりと足を閉じて、体を捻り、上半身だけを光之に預けている慶子。その内腿の、更に奥を目指す光之。またしても、素早い反応を見せる慶子。何とも、早い。
顔を寄せ合いながら、飽きもせず繰り返す、二人の攻防。光之に強引さはなく、楽しんでいるようだ。そのうちに、慶子の脇腹をくすぐり出した。堪らず、声を出して笑う慶子。光之から手を離して、身をよじる。肘で脇腹をガードする。がら空きになった下半身のそこに、素早く手を差し込む光之。パシンっ！　という音と共に、勢いよく払い除けられた。
「いてっ！」
陽光は、叩かれた箇所を押さえて、少しうずくまった。
はっとした慶子。

「ごめん」
覆いかぶさるようにして、光之に謝る。
謝ることに気をとられている隙をついて、光之の両手は、見事慶子の素肌の膨らみを捉えていた。ツンと尖った部分の感触を、少しだけ味わえた。
「もうー。エッチなんだから！」
今さら感のある台詞を吐きながら、慶子はさっと身を引いて、光之の両手から離れた。
勝った！　とばかりに声を上げて笑う光之。慶子を見ながら、胸に触れた指を噛んだ。
それを見た慶子。ズキンと走る感覚に堪えかねて、胸を押さえた。みるみる真っ赤になっていく。
「知らない！」
慶子は、光之に背を向けた。　その時、パチンッ、と音が鳴ってアコーディオンカーテンが開いた。そして、
「お取り込み中、申し訳ありませんが。トイレを貸して頂けないでしょうか？」
千尋の声がした。
二人して、声の主を見る。
いつの間に、身繕いをしたのか。着衣をきちんと着けた千尋が、僅かに開いた隙間から顔を覗かせている。そして、東一も。
東一と千尋のコトが済んでから、どのくらい経ったのだろう。既に日は陰り、薄暗闇が忍び寄っている。逆に、光之と慶子が戯れていた時間の長さを、表しているのかも知れない。
「我慢できないの。もう出ちゃうから、おねがい」
千尋に切羽詰まった様子はない。むしろ、余裕の笑顔を浮かべている。東一と連れだって、光之達の前に座った。
「なかなか、良いディフェンスだったな、慶子」
東一の言葉に、更に身を固くして、恨めしそうな目をする慶子。ふくれた顔を東一に向けてから、ぷいっと横を向きトイレに立った。

「いつから覗いてた？」
光之は、東一を軽く睨んで聞いた。
「うん。見事なフェイクだったな、光之君」
東一は、まともな返事をしない。
「だろ！　フェイント２つからのフェイク。最後はレイアップで、慶子のリングゲット！」
顔を見合わせて、バカ笑いする二人。そんな二人を見て、慶子にちょっぴり哀れさを感じて、トイレの方を見守る千尋だった。
その後、また四人でテーブルを囲み、宴は続いた。お互いのラブラブ度を見せつけるように、じゃれ合う二組のカップル。夜は更けていった。
亮太の事や、自身の胸の内に秘めた感情を語ることなく、慶子は無邪気に光之と戯れた。いつしか、光之に寄りかかって眠りにおちた慶子。

「おいっ！　おい、光之！　なにボーッとしてんだよ」
陽光の言葉で、我に帰った。
「あっ、わるい、わるい。亮太と慶子。ひと波乱あるかもな」
「なんでだよ？」
「実はな……」
今度は、光之が昨日の事を語った。
「光之！　そりゃまずいぜ。亮太が知ったら、大変なことになる。お前、殺されるぞ！」
あたかも、自分に降りかかった災難のように驚き、怒る陽光。
「別に。ばれたっていいぜ。やっちまった事だ。殺されもしねぇだろうし」
平然と言ってのける光之。更に陽光は驚いて、
「どうすんだよ！」
と、光之に詰め寄る。裏切りの感情を込めて、陽光は光之を睨む。

「そんなにおっかねぇ顔すんな。お前が力んだって、なんも変わらん。言いたきゃ、言って良いんだぜ、亮太に。ただな、慶子がこのまま亮太と付き合うなら、しまっといた方が良いことだ。どうするかは、慶子次第だ。俺から動く事はない。まぁ、何にもなけりゃ良いなんて、思っちゃいないけどな」

陽光の形相にも、昨日したことにも、動じる様子のない光之。多少の狼狽えを見せれば、更に責め立てる言葉を吐いただろうが。陽光の言いたいことを、そしてその答えまでも言われた気がして、肩の力が抜けた。

ふぅ～っ、とため息をついて。

「馬鹿どっちだ。呆れたよ。そんなふうに言われちゃ、告げ口なんて、出来るわけないだろ。まったく！」

風に流れる紫煙を眺めながら、

「青春どストライク。亮太と屋上の決闘！　なんかあっても面白そうだな」

まるで他人事のように、話す光之。屈託のない笑顔に、その覚悟を垣間見た気がした。

「なんかあったら言ってくれ」

陽光は、光之の腹にパンチを放った。その拳を受け止めて、

「愚痴でも言いたくなったら、聞いてもらうさ。帰るか」

活気を見せ始めた朝の街に、甲高い単車の音が響いた。

光之の都合　その４　覚悟（前書き）

亮太と別れようと決めた慶子。そして、光之への想いも絶ち切ろうとした慶子だったが……。

光之の都合　その４　覚悟

さて、そろそろ物語を冒頭に戻そう。教室で千尋が光之を誘った日に。

放課後、喫茶店で落ち合った三人。

光之の正面に慶子が、その隣に千尋が座っている。水や飲み物が並んだテーブルを前に、慶子は青ざめた顔をして少し俯いている。何かを喋り出す気配はない。それを横から心配そうに見つめる千尋。光之は千尋に話し掛けた。

「慶子は具合でも悪いのか？」

まるで空気を読まない、鈍感な台詞を吐いた。それを受けて千尋は、

「うん、悪い。そーとー悪いね。誰かさんのせいで」

三人の間で澱んでいた空気が少し動いた。光之は尚も惚けて、

「誰だ？　可愛い慶子を悩ます悪いやつは？」

自分など関係ないと言わんばかりの口ぶりで聞き返した。口の端を軽く上げて笑う千尋は、慶子に体をぶつけて、

「ちょっと、慶子。黙ってないで、この鈍感バカ男に何とか言ってやりなさいよ。ねぇ、ほらっ」

俯き加減だった慶子は、千尋に顔を向けコクンと頷いた後、か細い声で光之に問い掛けた。

「ねぇ、光之。あの時、どうして電話に出たの？」

慶子の中で、ずっと引っ掛かっていたことだ。

「あの時って、いつだ？」

「りょう（亮太）が、私に電話で告白した時だよ」

「あぁ、あん時か」

あの時。

亮太は、湘南旅行を共にした三人が見守る中、意を決して慶子に告白をした。それだけ信用があり、安心できる仲間ということだ。喜びは四倍に、悲しみは１／４にだ。
発信ボタンを見つめ、押そうとする。が、止める。
「やっぱり明日にする」
と言い出し、携帯を手放してしまう。
「根性出せ！」
と、はっぱを掛けられる。光之は黙って見ていた。
亮太は手放した携帯を、暫くじっと見つめてから手に取る。カーソルを合わせ、素早く発信ボタンを押した。大きく見開いていた目を閉じて、天井を向いて応答を待つ。床に着いた手は、掴めない絨毯を掴もうとしている。
数秒後、その手の動きが止まり亮太に緊張が走る。慶子が電話に出たらしい。
「あっ、もしもし、亮太だけど。あのさ……」
姿勢を前屈みにして、そこまでは喋れた。だが、その後が続かない。繰り返される『あのさ』。すでに、相手も察していることだろう。
口に出したら後戻りの出来ない台詞。
「お前が好きだ。付き合って欲しい」
それだけ言うのに、長い時間が掛かった。
固唾を飲んで亮太を見守る三人。『付き合って欲しい』と伝えた後に、二人の会話はない。
静まり返った部屋、物音ひとつしない。亮太の口が開かれるのを待つだけ。しかし、その気配はない。亮太の吐く、湿った息が携帯を濡らす。
永遠に続きそうな沈黙に耐えかねた光之。目の前の一点しか見つめていない亮太の肩を突っついて、ちょっと貸せ、と言った。
光之とは比べ物にならないほど、沈黙に耐えかねていた亮太。長い沈黙に、悪い答えばかりが浮かんで来ていた。素直に携帯を光之

に渡し、深く息をついた。
「突然で悪い、光之だ。亮太は真剣だぞ。だから、頼むよ。亮太と付き合ってやってくれ。なっ、俺からもお願いする」
そう言って携帯を返した。
僅かな会話の後、通話は終わった。二三日考えさせてくれ、そう言われたと。その後付き合い始めた二人。

「あん時は、面倒臭くなって、早く終わらせて欲しかったんだよ、正直。亮太の気持ちも分かるけど。告白なんて、人巻き込んでやるもんじゃないだろ。俺が告白したわけでも、返事を待ってるわけでもないからな。続きは他所でやってくれ。そう思ったからだよ」
そんなことかと、あっさり答えた光之。
「ひっどーい！　あたしあの時、もの凄いショックだったんだから」
緊張が解けたのか、慶子の声に張りが出てきた。そこに、千尋が横から口を挟んだ。
「あのね、光之！　慶子は1年の時から、ずっと光之のこと好きだったんだよ！　そりゃ、他の男子と付き合わなかったわけじゃないけどさ」
「ちょっと、千尋！　何で千尋が言うの！」
「あっ！　ごめん……つい」
ボルテージの高い二人の声。隣の席に座るおばちゃん達が、声高に話す二人の女子高生を見る。声の主と、その話に興味津々らしい。気配を感じて、さっと口に手を当てて俯く慶子と千尋。ほっぺたが赤い。そんなことには構わず、
「なんだ、そうだったのか。言ってくれれば、慶子なら何時でも大歓迎だけどな」
事も無げに話す光之。
はっと、顔を上げた慶子。
「それって、……今でも。ってこと？」

喜色に満ちた顔をしているが、歯切れが悪い。
「ああ、そうだよ」
あくまで淡々と喋る光之。ちょっと良い？　そう断りを入れて、落ち着いた声で千尋は問う。
「光之は彼女いないの？」
「彼女ってなんだ？」
「はいっ？」
一瞬言葉につまった千尋。こいつ何聞くの？　と思い、首を捻りながら答える。
「彼女は彼女。まんまでしょ」
「一緒に飯食って、映画見たりして、その後布団の中で合体する相手のことか？」
「違うわよ。お互いが好きだって分かり合っていていて、大切にしようと思いながら付き合っている女の子が居るかってこと」
「なら居ないな」
光之にこんな質問をした自分の間違いに気が付いた千尋。でも、慶子のために、どうしても聞きておきたいことがあった。
「大歓迎って言うけど、慶子をどう大歓迎するの？　山麓の不夜城とやらに居る尻軽女と一緒にするなら、私許さないからね」
光之の目をじっと見て、千尋は答えを待つ。
「ほう。千尋は俺に喧嘩売ってるわけだ。良いだろう、買ってやる。けどな、亮太の後にしてくれ」
光之のその言葉に、今、最大の苦悩から解き放たれた慶子。両手で顔を覆い、肩を震わせる。
光之はさっきから、隣のおばちゃん達の視線が煩かった。
さっと立ち上がり、
「出ようぜ。公園に行こう」
と言って、先に出るように二人を促した。そして、隣の席を睨んだ。
亀が頭を引っ込めるように、おばちゃん達は光之から視線を外し

た。
「見物料だ。安いもんだろ」
光之は伝票を投げた。
近くのブランコしか無い小さな公園に向かった三人。夕焼けの中、ひと気の無い公園で、慶子はむせび泣いた。千尋の制服を掴み、千尋を頼りに泣いた。
慶子を受け止めながら、無言で光之を見る千尋。光之がゆっくりと近付いてくる。千尋の目を見てを頷いた後、慶子の肩に手を掛けた。
少し離れた千尋が見守る中、光之は覗き込むようにして慶子に語りかける。
「なぁ慶子。亮太とは、まだ別れてないな。そうだろ」
光之の袖を掴みながら、しゃくりあげる息の中、頷きだけで『そうだ』と答える慶子。
「けじめ、つけてくるか」
慶子にというよりも、自分に言い聞かせているような光之。
まだ嗚咽の止まらない慶子に代わって、千尋が答えた。
「慶子はそのつもりだよ。例え光之に振られても、その前に亮太とは別れるって決めたんだよ。ただね、光之。あんたに迷惑かけることだけが気掛かりなんだ、慶子は。そのことに『ごめんなさい』するために今日付き合ってもらったんだよ。我儘な自分を許して欲しいと。そして、光之のことは諦めようと。あの日の楽しかった思い出を大切にしまってね。亮太に別れる理由聞かれたら、嘘なんかつけないからね、慶子は。だから、この一週間悩んでた。私が光之と亮太の仲を壊すって。そんなことして良いのかって。でも、きっと嘘なんかつけない。だから、悩んでた。そしてね……」
そこで一旦言葉を切った千尋。慶子をじっと見てから続ける。心なしか声が震えている。
「そしてね、慶子はね……、慶子はこの二ヶ月間ずっと苦しんでた。

馬鹿なあんたが、あの時に電話に出なかったら、慶子は亮太と付き合うことなんかなかったんだよ。それをあんた、面倒臭かったからなんて……」

千尋の目からこぼれそうな滴。構わず続ける。

「入学式の時から、ずっと光之のことを好きで……好きで。でも、悪い子だ。ヤクザと付き合いがあるらしい。そんな噂を聞いても諦めないで、届かないと分かっていても、ずっとあんたを見てきたんだよ。3年になって、光之と一緒のクラスになった時、慶子がどれ程喜んだか知らないでしょ！　授業始まる前に、席を立たないあんたを見て、どれだけ慶子がハラハラして心配したか、光之知らないでしょ！　ばかっ！」

零れる涙を拭おうともせず、気丈に立ち尽くす千尋。

光之は慶子の手をそっと退けると、携帯を取り出した。

「四丁目の桜公園に居る。すぐに迎えに来てくれ」

それだけ言って切った。

光之の手から離れた慶子は、千尋を求めて駆け寄った。千尋の手を取って、ただ見つめ合う二人。

成す術もなく、立ち尽くす光之。とぼとぼと歩き出し、キーコーキーコーとブランコを揺らした。そして、

「すぐには変われそうもないけど、良いのか？」

誰とはなしに、呟いた光之。

遠く、東一の単車の音が聞こえた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9389w/

ふりかえって告白

2011年10月26日09時08分発行